

539

34

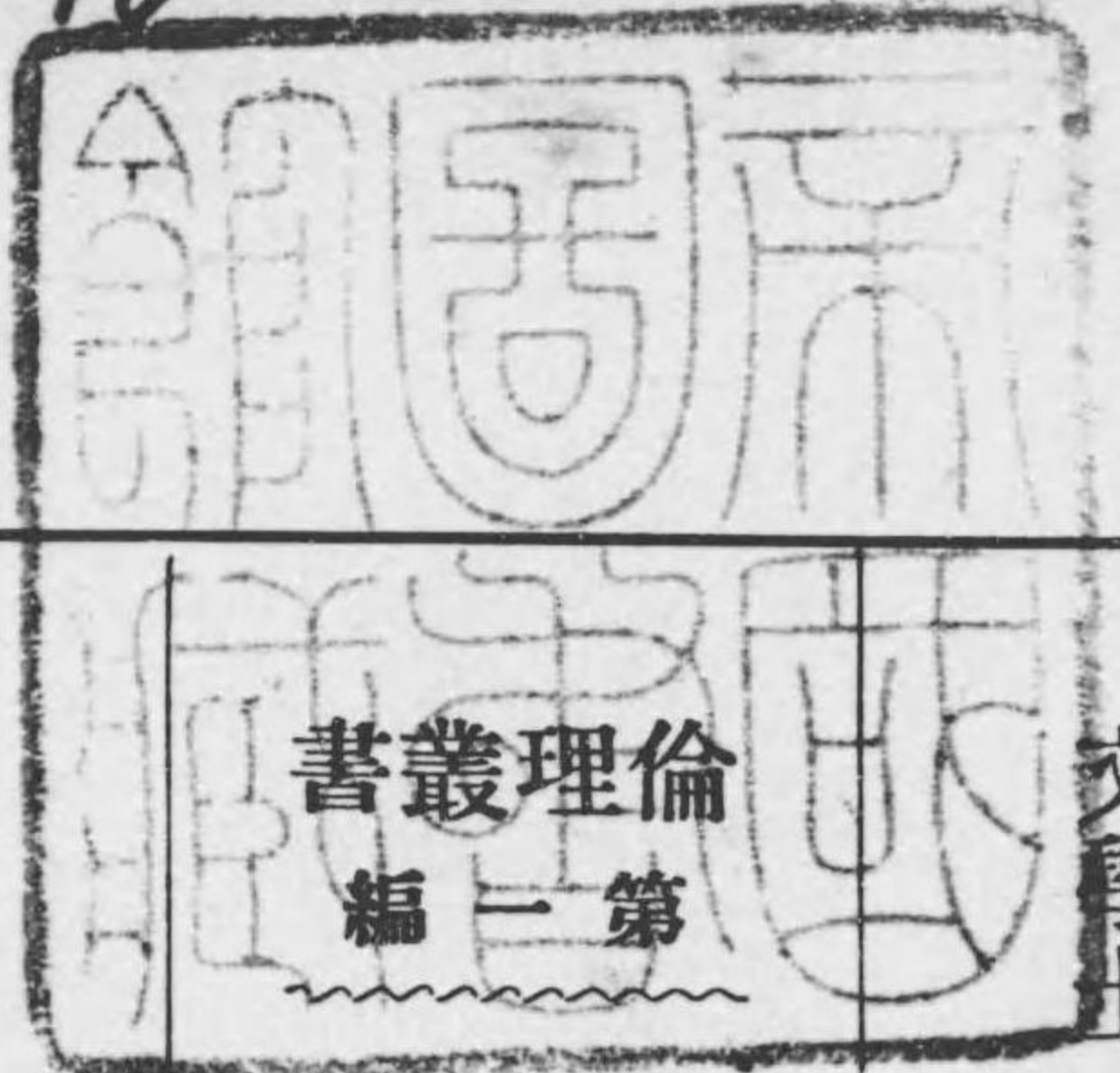


始



24-29 96

539  
34



倫理叢書  
第二編

文學士 島本愛之助著

英國の政治道德の基調としての

功利主義の發達

東京 寶文館發行

大正  
14. 4 20  
内交

## 序

- 一、我國民は政治道德に關しては獨逸よりも、佛蘭西よりも、却て英吉利の政治歴史に學ぶべしとは余の平素の持論である。今之の信仰に基いて本書を公にすることとした。
- 二、尙ほ、本書は數年前東京高等師範學校專攻科に西洋倫理史の一部として講じたものを基礎として編纂したのである。當時、功利主義を研究するに連れて近世社會の思想運動の一つとして功利主義を取扱ふ事に非常の興味を惹くに至り、且つ當時の英國を初め歐洲大陸の社會状態が著しく現代の吾國の社會事情に彷彿する處を感ずる餘り、之を一書として今や公刊するに至つた。
- 三、功利主義が單なる學說として其まゝ現代に入れられない事は既に序説に述べたる如くである。併し吾邦國民の實際社會生活上又政治生活上より見て健實なる英國の議院政治の基礎精神が是處に胚胎し、又現代世界の議會政治が

最も妥當なるものと認せらるゝ限り、之の多元的國家主義の基礎を成す功利主義運動は我國民の最も研究の必要あるものであることを深く信するのである。

四、概して云へば、吾國民の政治道德と云はず、廣く社會道德はまだ一道德的個人主義の訓練を缺いて居る。例せば、歐米に於ける廣汎の社會主義運動は其の多年の個人主義の訓練の後に止むなくして現はれて來たものである。然るに我國に於いては事情全く異なり、眞の國民生活の必要に迫らるゝ事なく、恰も醗酵の力なき泡沫的もやしの如くにして社會主義的運動が現はれつゝあるに過ぎない。然も又他面に於いて一部の國民は議會政治に對する失望の歎聲を發しつゝあるのである。今や我國民の政治的訓練は行き詰りの狀にある有様である。斯る秋に際し議院政治の基礎精神としての「最大多數の最大幸福」の原理を國民の腦裏に深く印象せしむべきが最も緊要の事

である。又斯くてこそ明治維新の「萬機公論ニ決スヘシ」てふ議會道德の有終の美を致さしむべき所以であらう。

五、卷尾に附したる三四の論文は此處數ヶ年間に物した余の研究論文の内より一部を収録したものである。内ち「グリーン對シヂェウキツクを論ず」の外は功利主義に直接、關連したものであるのみならず、功利主義其者に逆行した思索の上に論せられたものが尠くない。併し其等とて多少とも時代問題に觸れたるもの故、消極的には利用厚生の意義を有するものとして収録した。

六、英國功利主義の研究の參考書としては史的見地より三四の英國史を涉獵した外に、功利主義直接の參考としては凡そ左記の著述を主として用ひた。

Sir Leslie Stephen, History of English thought in

the eighteenth century, 2 vols. 3rd ed. 1902.

The English Utilitarians 3vols 1900.

W. R. Sorley. A history of English philosophy, 1920.

F. Joll, Geschichte der Ethik, 1923.

大正十三年九月廿四日

千駄木寓居にて

著者誌

Handwritten notes: 205, 160, 95, 3, 17, 2, 3, 6, 14, 5, 11, 3, 2, 5

目次

1

序 説……………一

第一章 功利主義勃興前の英國社會狀態……………二七

第二章 當時の社會問題……………四

第三章 時代思想の背景……………五二

第四章 ○ゼルミー・ベンサム of 生涯……………七七

第五章 ベンサムの倫理哲學……………八九

第六章 ベンサムの法律的及政治的思想……………一〇〇

第七章 ○ゼームス・ミルの生涯……………一三三

第八章 ゼームス・ミルの心理説及び倫理説……………一三二

第九章 ゼームス・ミルの政治論及法律論……………一三八

第十章のマルサス及其時代……………一四五

第十一章 マルサスの人口論と道德的見解……………一五三

第十二章 ジョン・ステュアルト・ミルの生涯……………一六〇

第十三章 ジョン・ミルの哲學思想……………一八〇

第十四章 ジョン・ミルの經濟學的思想……………一八七

第十五章 ジョン・ミルの倫理思想……………一九五

第十六章の歴史派としてのジョン・アウステンとデヨージ・グロート……………二〇五

第十七章 シヂユウキツクの倫理說……………二二一

---

グリーン對シヂユウキツクを論ず……………二三四

輓近社會學と倫理學との交渉……………二八七

マルクスに現はれたる進化論的思想及其批判……………三二六

法の社會的機能と道德の社會的機能……………三五三

英國の政治道德の基調と  
しての功利主義の發達

## 序 説

現今の實際社會問題と關聯して最も大切な道德上の概念の一つは有用概念であらう。兎角有用概念は、高尚な倫理哲學の上から、平凡で齒牙にもかかれられないものの如く見らる。併し我々の日常生活又實際生活の上から云へば、善惡といふ事それ自らが高低の如何に拘らず有用といふ事から判断されて行かぬばならぬと思ふ。我國では倫理道德を始めから大義名分といふ様な處に着

眼して、あらゆる有目的道德を卑しむ傾向が尙ほ傳統的に著しい。我國國民の道德生活が地上を離れて、只空虚な形式生活に墮する形跡が見ゆるのも蓋し是に基因する。此點は共に國民の自覺の必要のある處と思ふ。今此倫理上の有用概念に就て便宜上、實際的方面と學術的方面とから、考察して見ようと思ふ。



先づ實際の方面から觀察すると殊に今日の政治道德の上にて必要な點を認める。實例を擧げると英國の政治界、就中久しい間に英國に於て訓練された議會政治を考察すると、其根柢に著しく有用概念が働いてゐる。有用概念の起りは少く共個人的色彩を有つてゐたとみるべきで従つて英國の如く其社會生活を歴史的に個人主義の上に建て、をる國柄にては、此有用概念が政治道德の基調をなしたものと見るべきである。畢竟今日の代議政體は國民の最大多數の最大幸福を標準としたもので、其處から夫の政黨政治が作られて來たのである。政黨中にあつても保守的幸福を欲するものと、進歩的幸福を希ふものがあるのは自然の勢である。然も茲に政治上の所謂英國流の功利主義の躍動してゐるのを看取し得る。英國は年久しくフィッグ及トーリーの二政黨が互に消長した。トーリーは保守を、フィッグは自由を代表して、其間に國民多數の

求める國家的有用性が歴史的に發展して行つたのである。人も知る如く英國は一方に於て非常に保守的國民性を持つてゐる。併し其保守も決して一概に保守ではなく、謂はゞ有用的保守である。故に他方にてその保守的傾向は又有用的進歩主義と絶えず相結合し、聯絡して進んでゐるのである。換言すれば有用性或は功利性を中心として、保守進歩の政治的機能が最も健全に働いて居るとみられ得るので、茲に英國の政治の特長があるのである。我國民の如きは須く其政治的形式主義を捨て、英國の政治的實質主義を學ぶ可きである。かくの如く英國は保守の精神を功利的に維持しつゝ絶えず進歩の道を辿つて來たのであつて其成績の見る可きものとして夫の有名な三大法典の建立を擧げることが出来る。第一の法典は一二一五年のマグナカルタの大憲章と、第二は一六二八年の權利法請願、第三は一六八九年のオランダ侯治下の權利法典である。此三大法典は國民の徐々時代の進歩に伴ふ自由の要求であつて、而かも其自由

は佛蘭西の革命時代にあらはれた如き抽象的、感傷的自由でなく飽く迄も實質本位のものであつた事は吾人の特に留意すべき所である。

現今世界に流行するデイモクラシーの精神は、元より世界的ではあるが其源泉は此英國の國民性にあると考へられる。デイモクラシーは普通、民主主義或は民本主義と譯せられるが、かく譯す時は其意味が政治的にのみ限定せられ其眞の精神が傳へられない嫌がある。デイモクラシーは決して政治的にのみ言ふ可き事ではなく、あらゆる國民の社會生活の特徴と見る可ものであらう。就中、此考が英國國民性の上に歴然として見出されるのである。英國々民性は其國民の持つ哲學思想により能く代表せられるが一言で以て言へば、個人主義的多元説である。此國民性が政治上に現はれて所謂民本主義となる。然に是が又北米大陸に傳はつて米國人の現代生活に著しく現はれて居る、尤も民本主義の精神に就ても米國人と英國人との間には餘程趣きが違つてゐる。米國人も有

用的精神に富んだ國民であるけれども是を英國人に比する時は遙か有用的精神の缺乏して居るのを看取し得る。米國人の國民性中には有用的精神の他に虚榮的要素が含まれてゐるとは誰しも直感せず居られない。其點から見ると世界廣しと雖も眞の有用的功利的民本主義を所有してゐる者は英國人の外にないといはなければならぬ。斯て英國の議院政治が着々と堅實の歩を進めて發達して行く處は到底米國始め佛國其他の國々の代議政體の追隨を許さぬ點である。英國政治家の道德思想の如何なるものかを知る材料としては夫の佛蘭西革命の場合である。當時の英國の政治家が採つた態度についてみると最も明瞭に判かる。有名なる政治家のバークは言ふに及ばず、ピットの如き進歩主義的政治家も佛革命黨員がルイ十四世を弑逆するに及んで、忽ち其革命運動に反感を持つたのである。ピットの如きは一時は佛蘭西革命の精神を賞讃した人であるけれども其實際の暴狀を見るに及び徒らに過激にして有害無益なる革命運動を

Wardlaw 2/17/18

憎むに到つた。當時の是等の英國政治家、佛蘭西革命に對する態度は如何に英國政治家の空理を避けて實質を重んじたかといふことを雄辯に説明する實例である。此英國の政治的道德が連綿として現代に及び、夫の保守的英國にして猶ほ現今の進歩的マクドナルド労働内閣を組織せしむるに到つたかを考へた時に、我々は英國政治の發達の堅實味を羨まずには居られないのである。何時の日にか我國に於ても實質的進歩主義としての労働内閣の實現を見るに到るであらうか、洵に望洋の感なき能はずである。

ひるがへつて是を英國に於ける一般社會經濟運動の上からみても、かの有名な英國社會主義の鼻祖ゴドウィン以來着々實質的に發達して來た英國一流のギルド・ソシアリズムやフェビヤン・ソサイエテイの發達の如きを見ても洵に敬服に堪ふない。我國の一般社會運動の如きもすべて空虚なる思想を捨て、此有用概念の上に立ちて須らく英國の如く堅實的に發達す可きである。

### 三

翻がへつて我國古來の歴史的精神を考へてみると、必ずしも現代の我々が想像する如くさのみ有用的要素が缺乏した譯ではない。大和民族古來の純粹の傾向は寧ろ實際的又有用的であつた。其が證據として、例へば神道の中に含まれた精神は極めて現實的である。神ながらの道といふことも要は現實主義を標榜したものといはなければならぬ。その他、從來から我國民性を研究する人々の異口同音となへる潔白性とか、常識性とか、又尙武性といふが如きものを考へ合はした時に、明かに其處には功利的要素が我國民性の先天要素として既に含有して居つた事を歴史的に證明することが出来る。以上の我國民の現實性や功利性又は有用性といふ様なものが時代を経ると共に次第にうすらいて行つた事は又争ふべからざる事實である。その原因は蓋し外來文化のためにその特性を抑制せられた事にあると思ふ。就中、我國民性の有用性を奪つたもの

は佛教の文化であると云はなくてはならぬ。欽明の朝に始めて佛教が我國に入つた頃は我國民の先天的有用性は猶ほ非常な勢力を持つてゐた。當時、佛教が渡來する際に「此法よく無量無邊の福德果報を生ず」といつて我國に入つて來たのである。それ以來、奈良朝の佛教は著しく世俗的信仰であつた。時としては佛に祈つて雨を降らし又時には佛に祈つて病を治した歴代の天皇が居らせられた位である。以て奈良朝時代の初期の佛教が如何に我國民の有用性に順應し様と努めたか想像するに餘りあるのである。然るに平安朝以後の世俗の宗教的信仰は著しく遁世的氣風になつて來てゐる。平城天皇の頃から皇室におかせられても餘程佛教の厭世感化を蒙られたと見え、世々の天皇は讓位を熱望せられ藏人所、檢非違使廳が設けられた頃から政權が此朝廷の遁世氣風に乗じて當時の政治家及武臣の手に落つる様になつて來た。是以來我國の國狀は日々有用的要素を失つて形式的遁世の氣風に耽溺するに到つた。

11

有用的性質が著しく缺乏するに到つたのは今一つ見逃す可からざる外來の文化の影響がある。其は老莊の哲學、及び神仙の氣風の影響である。老莊及神仙の氣風は元々我國古來の先天的のものではない。明かに支那國民性の所産であつて、是等が直ちに我國古來の精神に影響を及ぼした事は想像するに難くはないであらう。然るに此影響が漸次我國民性に沈潜し來つたのは主として文藝の趣味からであつたものと云ふ可きであらう。老莊と神仙と佛教との影響が如何なる結果を我國民性及國民思想の上に及ぼしたかといふことは今更ら詳論の必要はあるまい。然し、現代の我國民が猶ほ其影響を盲目的に蒙つてをるか乃至は自覺し乍らも其影響から逃る可からざる有様に居る事は特に現在の我政治道德、社會道德の方面からみて甚だ遺憾とする所である。老莊、神仙、及佛教から受けた深甚なる影響は今尚ほ我國民の生活形式の中に強く印象されてゐると思ふ。此を一言にして言へば、高踏的、超俗的、遁世的といふ

ことが出来る。其結果として高踏的超俗的たることが其自ら尊きものゝ如く直観する氣風が強く現はれて來てゐる。其結果として個人の人格を賞揚する時にも、或は磊落と云ひ或は超俗といふが如き形容詞を其まゝ使用する様になつて來た。其が爲め古來の現實的、實踐的、有用的先天性は却つて町人根性として卑下せらるゝ様な傾向が現代尙ほ著しいのである。かくては如何にして此世界の時勢的大潮流に立つて、大國民としての社會生活を積極的に建設することが出来るであらうか宜なるかな、現代の我國の政治道德の擧げざるや。

#### 四

次に從來の我國に大影響を與へた外來文化として注目す可きものは儒教の精神である。儒教の精神は以上の老莊、神仙、及佛教とは餘程趣を異にして有用的の要素を充分に包含してゐる。儒教の精神を一言にして言へば實證的理想主義といふ事か出来る。元より哲學上より見たる場合の理想主義としては不徹

底な點があるが、元々儒教は孔子の精神によりて有用的理想を標準として立つたものである。従つて一面から見れば、儒教は人間の意志生活を重んずる點に於て我國の古來の先天的國民性ともよく適合する點があると云へる。従つて儒教の影響は社會道德的に將た又政治道德的にみて却つて現代の國民生活の上に大いに利する所があつたと云はなければならぬ。抑も徳川時代の政治道德は殆んど儒教によつて教へられたと云ふべきである。徳川家康が江戸幕府を開くに當り、藤原惺窩や林羅山の如き儒者を集めて、あらゆる政治的行政的組織を此等の學者の手に一任した。その結果、徳川時代の封建制度は世界無比の制度として實現せられ、社會のあらゆる階級は最も有用的機能を發揮したのである。此等の事のために武士階級の氣風は元より、一般庶民階級の氣風も著しく有用的となり、從來の遁世的氣風は著しく改善せらるゝに到つた。併し尙ほ儒教文化の影響は他方に於て眞の有用的精神を政治的に鼓吹するには到らなかつ

た點がある。例へば、儒教の中に在る一種の形式主義が種々なる點にて我國のあらゆる階級を犯した。殊に政治の樞機を握つた武士階級は一部その封建制度にわづらはされたとはいへ、他は多く儒教の形式主義によりて眞の發洩たる有用的精神を發揮するに到らなかつた觀がある。徳川時代の武士は多く義理の區別を教へられ、武士は金錢に近寄る可からず、市民生活には近づくべからずといふ嚴重なる掟の下に武士的道德精神を養つた。従つて其結果は他方に於て政治道德の本質としての儒教の有用的精神を體驗するに到らなかつたのである。

併し乍當時の武士道の中にも最も見識ある人々によては利必ずしも義に相應せざるものに非ずといふ見解が持たれて居たのである。例へば世人が一般に赤穂義士の精神の上に最も明快なる義利の辯を教へ、偉大なる武士道を鼓吹したと想像せる山鹿素行が、必ずしも有用的精神を無視したのではなかつた。否寧ろ

政治道德としての有用主義を主張してゐる事は彼の謫居童問中の次の如く述べられてゐる點から考へても凡そ其精神がわかる。

「利は易の四徳の一つ、書の三事の一つにして、是を嫌ふべきに非ず。人の心皆好利惡害の二つあり。是を好惡の心といふ。此心にたよりて教へを立て遂に聖人の極を述べ給ふ」云云。

「此利害の心あらざれば、死灰枯木にして人に非ず。人情は古今異ならず、四海共に同じ、故に孟子性のことを論じて以利爲本といへり」云々。

又曰く「若此利心を失脚せば君臣上下の道立たず」(同上)

又素行は佛教及老莊の思想を嫌つて次の如く云ふ。

「尙詳く論する時は矯人情寂滅にかへりて佛説に近し、直情は虚無にして老莊教にかへること也」云々(聖教要録)

かくの如き素行の考へは所謂義は事の宜しきに從ふの意で明かに其處には有用

的精神が充實してゐなければならぬといふ考である。此考は明かに武士道の根本精神と云はなければならぬ。然るに不幸にして封建制度の武士の風習は克己的要素が偏重せられ不知不識に武士をして有用的精神をはなれしむるに至つたのである。

武士の生活は直接生産的の要素がなく、只一定の治者階級としての形式主義の生活形式を送つた事が就中、徳川時代の封建制度に見らるゝ所のものである。勢ひ斯の如き武士の生活からは義を重んじて利を軽くする實踐道德が生れて來可き筈である。すべて、我國に限らず世界中の武士氣質は物慾に對する克己的道德、理性的道德が秀でゝゐたのは争へぬ事實である。従つて武士道のみを過去の唯一の國民道德と考へる我々は兎もすれば現今に於ても道德の有用方面を一切輕蔑する事は自然の數である。又其武士道の問題によつて修養した明治初年の志士の政治道德に關する考も主として大義名分忠君愛國を以て一貫し

た事も首肯かるゝのである。併し現今の如きデモクラシーの精神を基礎とする政治界では以上の過去の政治道德では不充分である。今後は充分に有用概念に基く實質的政治道德を養つて行かねばならぬ。

ひるがへつて維新以後の我國に注入せられた西洋の政治思想を考へて見ると、第一に佛蘭西革命後の自由民權の主張が殊に我國の政黨の發達の上に大影響があるのである。併、此自由民權説は現代の政治思想から見ると依然として抽象的、空論的である。何處かに利用厚生の着實な考へが缺乏してゐる様に思へる。今一つは英米思想の注入である。此方面は功利主義の要素が尠ならず含蓄せられてゐる。けれ共其發達は現今にては甚だ微々たるものである。例へば加藤弘之氏の強者の權利主義の如き、又福澤諭吉氏の獨立自尊主義の如きは少く共我國政治道德發達の上に大影響を與ふ可き筈のもので、而も其效績の見るべきものゝ少いのは遺憾である。功利主義の思想を其儘我國の

政治道德とするのは蓋し世の識者の反對を購ふ所以であらう。殊に功利主義が現代の進歩したる學問の上よりみれば著しく個人主義で甚だ面白くないと云ふ批難は必ずあること、信ずる。其點は現今の如き個人主義を根絶しやうとする時勢的要求には反馳するものだといふ非難があらう。併し反對論は多く純粹學理的立場であるが、實際の我々の國民生活の政治組織から云へば依然個人主義の上に立たねばならず、又同時に「最大多數 最大幸福」主義で行くより外に適當の途はない。何となれば現今の世界の代議政體は既に十五世紀に始まり實際的運用は今尙ほ根本に於て個人主義の精神を以て一貫して居る。縱令學理上の進歩があり、其上から政治的個人主義が放抛せられたとも現代人が尙ほ「最大多數の最大幸福」を基礎として政治道德を振興せしめて行かなければならぬ。此點から代議政體に據る立法機關を有する限り、矢張、輿論政治として功利主義の實際道德を出來る丈尊重し、出來る丈洗練する事が何よりも大切

# 欠



# 欠

## 第一章 功利主義勃興前の英國社會狀態

近世に於ける英國の社會狀態は常に反動的狀態を繼續し、保守進取の二潮流が交互に社會水平線上で顯はれて居つた。而して此の二潮流は敢て政治界と云はず、宗教界と云はず、經濟界、思想界、道德界、並に一般社會風習上にも廣く其潮流に浸潜した反動的傾向を顯現して居つた。然も此の二潮流の消長は歲月を経るに従つて、次第に進取的潮流のために保守的潮流が浸蝕せらるゝ傾向を示した。此の時勢の趨向の裡ちに漸次醞釀せられて來た一つの進取的精神運動が功利主義の運動であつた。其功利主義の運動が就中英國國民一流の政治道德の特徴を具へて居つた點が殊に本書の研究に於ける興味を中心とする處である。

近世に於ける英帝國の保守主義の頼みに衰微し初めたのはチャールズ一世（一

六二五——一六四九)の時代である。是の朝は從來の帝王神權説が俄然衰退して政治界と云はず、思想界と云はず、漸次民權説が世に流行し初めたに歸因する。チャールズ一世の前の帝王ゼームス一世(一六〇三——一六二五)は極端な神權論者であり、又神權維持のために専心努力した。其遺業を繼だのがチャールズ一世であつた。此の時代からして、宗教上の舊新徒派の争ひに伴つて政權が益々國民一般の掌中に落つるやうになつた。當時の下院の狀態もゼームス一世の時代から漸次新教徒の勢力が増大し、チャールズ一世の代に至つて遂に一大革命が勃發して共和政體を見るに至つた。其が爲めに、英國に於ては一時帝政が中絶し、世に有名なクロンウエルの國保時代が約十年間繼續せらるゝに至つた。是が先づ近世英國政治界、其他一般社會に於ける進取黨の社會革新の烽火の第一著手であつた。

クロンウエルの革命があつて以來、間もなくチャールズ二世が即位して、再び

帝政が復活した。是以來國教黨と清教徒との間に争闘が連續し、是の宗教的色彩の相違が明に歴史的に二大政黨を形成する因となるに至つた。即ち一つはファイヴグ黨であり、他の一つはトリー黨であつた。又前者は清教徒と固く結ぶ進取派であり後者は國教黨と結ぶ保守派であつた。是が後世永く英國の二大政黨の基礎となつたものであつて、前者は當時にあつて、國會開設論者の中心となり、後者は國王を援けて、専ら保守的政治に固守したものであつた。此の間に在つても自ら保守、進取の黨勢の消長はあつたが、次第に其社會的立脚地を造つて行つたものは依然ファイヴグの進歩黨であつた。彼のクロウエルの革新運動に次で、第二回目の革新運動の出現したのは史上有名なウィリヤム、オレンジ侯の來英の一件である。當時英のゼームス二世の皇女メアリーは和蘭のオレンジ侯に嫁いて居つた。爲めにゼームス二世の後を襲ふて侯妃メーリ及オレンジ侯は來つて共に英國の王冠を戴くに至つた。斯る事情

の出来した裏面には、矢張り英國に於ける新舊一教徒の勢力の消長が其因を作したと見るべきであつた。兩人が戴冠するや否や、先づ有名なる彼の「權利法典」(I)を編纂し、次で是法典を天下に布告した。此の法典は彼の千六百二十八年の「權利請願」以來の民權伸長の大法典であつて、此以來舊來の王權は著しく浸蝕せられ、是に反して民權は益々伸長するに至つた。其結果英國政治界は萬事面目を一新するの概があつた。搗て加へて、ウキリヤム朝以來其英國の工業界は一大發展を遂げ、英和の間の通商貿易が益々殷賑となり、此の産業的趨勢が社會一般に進歩的影響を及ぼすことが又異常であつたとも想像に難くないのである。

以上の時代趨勢は永く第十八世紀に至るまで英國の一般社會を支配した。然し此處に注意すべき事は、當時の政治界に於ける進歩主義は必ずしも未だ革新的と云ふ程のものではなく、其後に於て發展した自由思想や、世界主義の運動

等に比しては當時の政治界は未だ一保守的色彩を強く持續して居つたのである。其證據には當時の政治界は第十八世紀以後の政治界の其が如く國民的又は輿論的ではなかつた。只だ一部の専門政治家即ち國會議員の間に止つた進歩主義で決して眞の民主主義的の意味のものではなかつた。従つて此種の進歩派も必しも國民全體の利益の立場を思ふのではなく、寧ろ自己一身の利害打算から保守黨に對立したのであつたものである。即ち當時の國會議員は多くランド、ロード即ち地主であつて所謂カンツリ、ゼンヌルメンと稱せらるる人々であつたから縱令、其がフイグ黨であつたとしても農民黨であつたといふことが出来るのである。後年宰相ピットが農民黨の勢力を削がんとした際の事情も能く此間の消息を語るものである。斯くて、所謂政治界に於ける進歩黨も是を第十八世紀に擡頭した産業界、乃至貿易界の進取黨と比喩して其處に非常な進取主義的精神の相違があつた。以上の理由に基いて近代の英國に於ける眞

の進取的精神と勇往邁進の力は反つて後の貿易業者や、産業界に於ける獨立自營の人物の間から醗酵したものと云ふべきである。又其社會に於ける新勢力が次第に其等の經濟的方面から社會改造の叅明を告ぐるに至つた事も併せ知らなければならぬ。功利主義の思想は實は其革新的機運に乗じて現はれたものであつた。當時英國から現はれた是の功利主義が遂に第十八世紀以後の歐洲大陸の社會改造の原動力となつたことは近世史に於ける見逃すべからざる重大事であつた。(H)

以上は英國の國內に於ける趨勢であつたが、國外に於ける當時の事情も又功利主義の革新運動を誘導す機運を作つた。第十八世紀に於ては、英國は當時新發見の米大陸に於ける外國との利權に關する葛藤を起した。就中、英佛間の葛藤は千七百五十六年より千七百六十三年まで繼續した英佛七年戦争を惹起した。搗て加ふるに、東印度に於ける利權の衝突から、東印度戦争を起し、其

孰れも英國の勝利に歸し、従つて其結果、英國の對外貿易は一時に大發展を遂ぐるに至つた。是等の事件あつて以來英國貿易業者の社會に於ける勢力は非常なものとなり、其貿易業者は只管ら進歩主義的、世界主義的運動へと進んだ處から、是又思想運動としての功利主義を誘發するに與つて力ある處となつた。抑も英國の國體は古來、保守的又民族的であることは世人の熟知する處である。然し其保守的民族的傾向は之を分析して見ると其奥底に流るる一種獨特の民族性に基くのである。其は實用主義的精神、功利主義的精神是である。空理空論を棄て、實利を採ると云ふことは、勢い國民をして保守的ならしむるのであつて決して先天的の保守ではない。急激する變動革命は決して實益を齎すものではない。従つて佛國革命の如きに對しても英國人一般は是に共鳴せず、比較的革新的の傾向を持つた功利主義者ですら當時の佛國革命を衷心嫌忌した次第であつた。是等を以て考察しても、英國に於ける功利主義は

英國獨特のものであつて、當時の大陸諸國には功利主義の發達を見なかつたことも大いに理由あるである。當時の歐洲大陸の總ての社會事情は中央集權主義であつて、勢ひ英國の其が如く個人主義的、自治主義的の政治は孰れにも見る事が出来なかつた。勢ひ政治運動は凡そ空理に走せ過激に終る有様であつた。然るに英國は一面進歩主義で他面常に穩健の國運を就成したのは主として此の功利的精神に負ふ處が多いと云はねばならぬ。

尙ほ英國民として進歩主義を奉じ乍らも穩健なる國民生活の發達を遂げしめたといふ事に就ては、一方に自治的精神の旺盛なものがあつたからである。英國の自治的精神は主として第十八世紀の功利主義運動から派生したものであつて云はゞ實利を主とする英國民族の精神に基因するのである。此の實利的個人主義は當時の特權階級としての地主及貴族の間にも瀰漫して居つた時代精神である其あるがために、貴族社會の保守主義も強いて功利主義的運動に對する反

抗の聲を擧げない。加之、反て時勢と共に推移した傾向が見えたのである。當時の社會に於ける革新運動は一方に於て以上の如き進歩的個人主義の勃興であると共に、他方に於ては保守黨としてトーリ黨と結托した從來の僧侶團(III)の勢力が日々に墜落した事も又大に原因した。從來の僧侶は兎も角も神權の擁護の下に巨大の社會的勢力を有して居つたのであるが、世が次第に進歩的色彩を帯ふると同時に、政治上に於て先づ其勢力を失墜し、是に次で僧侶自からの任免黜陟の權能をも遂にはフイツグ黨のために奪畧せらるゝと云ふ有様になつた。宗教團の勢力墜落の原因は今一つ科學の研究及發達と云ふことにも大なる原因があつた。第十七世紀の後半は英國の各大學に於ては一般科學、就中、解剖學、史學、植物學、地文學等の研究が、次第に流行し、千七百五十九年には化學の講座は各大學に新設せらるるに至つた。其他經濟學の研究の如きも至る所に行はれ、オックスフォード大學及ケンブリッジ大學等に於て各十數名

の教授が之を分擔しつゝ研究したと云ふ有様である。其結果信仰の自由は益々高唱せられ、ユニテリアニズムは僧侶の區別を益々混亂せしむるに至つた。

従つて、従來の保守的宗教は教育ある人士の間には行はれず、宗教上に於ける從來の神秘的氣風は漸やく世人に疎せらるゝに至つた。其結果、從來の宗教團は自然の裡ちに其勢力を失墜するに至つたのである。以上の教育團の勢力墜落は主としてイングランドに於ける状態であつたが、反つてスコットランドにあつてはイングランドの如く急速の變化は見事な出来なかつた。

第十八世紀に入つて時勢が著しく變遷するに至つた。其の大原因の他の一つは産業界發達と云ふことであつた。此の世紀の前年は未だ工業界の進歩を見るに至らなかつたが、後半に於て俄然機械工業の一大革新を見るに至つた。當時ワットの蒸氣機關の發明を初め、アークライトの多軸紡機、クロンプトンの精紡機等引きつゞいて新發明あり、それがために生産界は一時に勃興し、是に従事する

人々は自から社會の一大勢力を造るに至つた。此の資本制度の下に一大發達を來した社會事情は、從來の地主の政權を掠奪し、著々産業的權力を政界の上に移植するに至つた。此の時代の趨勢は思想的方面に在つては功利主義運動となつて、當時の一般社會の上に現はるゝに至つたのである。

當時産業革命に隨伴して現はれた社會現象は交通機關の發達に伴つて先づ勞働者を工業地に集中せしめたことである。其が亦政治界其他一般社會に進歩の機運を作る一つの有力なる原因となつたことも見逃すべからざることであつた。千七百八十四年には郵便馬車の制度が新設せられ、先づ是によつて國民相互の通信交通の便宜を得、次では一時に道路及運河が縦横に各工業地を通じて作らるゝ云ふ有様であつた。斯の如き事情より、世は益々從來の保守的基調を失つて、進取的實利主義と個人的自由主義への方向に進まんとするに至つた。是の状態が又功利主義を思想界に誘引する大原因の一つであつた。

機械工業が勃興するに連れて、起業家が英國の各都市に輩出し、其隆盛を競ひ多数の労働者は巨大の生産能力を發揮するに至つた。其と共に從來の幼稚なる産業組織は資本制度の下に益々複雑な分業的大組織に化するに至つた。是處に及んでは最早や國家や之を代表する政府の統整は其力及ばず、只だ生産者間の自由競争に一任するの外はなかつた。此の形勢は一方に於て極端なる個人主義的經濟思想を促進すると同時に他方に於て己に業に現代の社會主義的經濟思想を胚胎せしめて居つたのである。斯る個人主義的、自由主義的、生産時代に生れた經濟學界又道德思想界の偉人はアダム・スミス(1723—1790)であつた。彼の言は實に當時の時勢的表徴であつたと云はなければならぬ。即ち彼は、

*The progress of improvement depends upon 'the uniform, constant, and uninterrupted effort of every man to better his condition.'*

と云つた。自由主義の經濟思想の綱領は此の一言で盡きて居る。(IV)之を裏から

云へば、個人の旺盛なる利慾心は飽くまでも自由競争に一任して、決して社會國家の干渉すべきものでないといふことにある。されば當時の事業界は當時の政府及其當路者を目して無用の長物と思惟し、又興業家の手によつて開鑿せられた運河、又道路等より無斷に徵税し、且其に因つて己の生活を支持する一種の寄生蟲なりとさえ惡罵したのであつた。斯る社會趨勢の間からは果して如何なる思想が生まるゝかは一見明瞭である。實利的見地を緯とし、個人の自然的自由競争主義を経として、織り成せる當時の一貫した社會思想は要する功利主義的思想であつたのである。

以上の機械工業の發達の時代に生れた發明發見家や一代の富豪は多く下層界に生ひ立ち自助自營の成功者であつたことも大に注目すべきである。自由競争の時代には最も露骨な個人主義活動が行はれて、王侯宰相も富豪も更に種がなかつた。ジョン・メトカウフ(一七二七—一八一〇)は英國の道路開通の大事業

に成功した人として當時有名であつたが、是一個の貧窮農民の子息であつた。又マンチエスター市及びヴァアプールの繁榮のために、運河を開鑿した彼の有名なプリンドレー(一七一六—一七七二)の如きも一介の炭坑夫の子息であつた。其他ワットの如き、クロンプトンの如き、ハーグリーブスの如き皆貧困の家に生ひ立つた天才であつた。是等の科學的發明發見等に於て續々成功者を輩出したことは、當時の社會をして成功の標準を一は富貴の上に求め、他は科學的智識の上に求めしめたのである。是處にも世人をして實利的意識と科學的個人主義の意識の上から、自然、功利的思想に趣かしめたことが首肯せらるゝのである。斯くの如く、産業界と云はず、政治界と云はず、世人が著しく進歩的になつたと云ふことは、一面より觀察すれば英國社會が民主的になつたと云ふことを示すのである。政治的に云へば、ファイグ黨は自由平等を好愛する政黨團體であつたがために、少なくとも政治界に於ては民主的の傾向を持つたのである。然し他面

から見ると之の社會的傾向は必しも眞の社會的デモクラシーではなくして、個人主義的デモクラシーであつた。従つて此種のデモクラシーは一步誤れば貴族主義的傾向を帶ふるに至つたことは明白なことである。現今の産業界の資本主義の傾向が政治界の貴族主義と著しく連絡する點のあることは明に以上の理由に依るのである。是點に於て功利主義運動は當時の英國社會に於ては民主主義的であつたとは云へ、現今より見れば明に社會主義等に對抗する資本主義の道德主義であつたことが知らるゝのである。

以上の功利主義的文化は我國に在つても明治初年に於て著顯なる文化的現象であつた。明治維新は要する過去の沒我的文化や、武士道的團體道德を拋棄して専ら西洋の個人主義文化を模し、搗て加へて經濟組織の上では飽くまで資本制度を採用したのである。其が現代に至つて、或程度までの破綻を來したのは必然である。自由競争の原理が極端に進んで、富が一方にのみ集中する結



果、其原理も全く用を爲さなくなつたことは、今や我邦の經濟上にも同じく煩悶である。是種の煩悶は歐米に在つては二三百年間に徐々現はれた處であるけれども、我國に於ては僅かに維新後數十年の變遷である。其丈け其社會的煩悶の形式が異常の姿を呈するの亦止むを得ない處と云はなければならぬのである。

(I) 英國の憲法には先づ千二百十五年のマグナカルタの大憲章となつて現はれ、次で千六百廿八年の權利請願となつて現はれ、第三にはビル、ホグ、ライトにして現はれた、是の三つを英國の大法典となせるもので、孰れも民權伸張の過程として現はれたものである。

(II) 此時代の功利主義的運動は明に一種のデイモクラチックの運動であつた。然し此の時代の民主主義は自由競争主義の其であつて、今日の民主主義運動は反自由競争主義の其であることは大に注意すべきである。思ふに各國の明治維新も英國の第十八世紀の功利主義と同一軌を取つたものである。

(III) 'Church of England' と云ふ名稱は餘程古くからある。即ちローマ教會から、獨立する以前からある。然し、確實には千五百三十三年の高僧會議に於てヘンリー三世をイングランド教會の最高地位に載いたのが獨立の最初である。千五百七十年には、羅馬教會はエリサベス女王を破

*Bill of Rights*

門した。是以來全くイングランド教會は獨立した。

(IV) 千七百七十六年に上梓したアダム、スミスの富國論にはギルドの弊を論じ、束縛を脱し自由主義を奉すべきを論じて居る。如何に現代の時勢思想が變遷しつゝあるかと明である。

## 第二章 當時の社會問題

第十八世紀に入つて以來、英國に於ける社會事情は益々葛藤を來し、爲めに諸種の社會問題が踵起するに至つた。又其等の社會問題が反て益々時代精神をして功利主義に赴かしむる元動力となつたのは大に注意すべき點である。

當時の社會問題の一つは貧民問題であつた。機械工業の發達に伴つて、貧富の差が益々激烈となり、就中、第十八世紀の後半は貧民問題は社會の由々しき問題となつて來たのである。元來英國に於ける中世紀の労働者は未だ土着の奴隷シヤッフであつて、其が近世に入つて即ち千六百〇一年エリサベス朝に於て有名な貧民法が設けられ、之に據つて、貧民労働者は必ず一定の教會區パリスヒユの保護を受くべしと云ふことになつた。然るに第十八世紀に入つては前述の時勢の變遷に伴つて工業の一時の勃興、交通貿易の頻繁なるに連れて、労働者は最早や一

定の教會區に定住するものが無くなり、自由労働者の數は當時の經濟關係と共に益々増加するに至つた。其結果、從來の貧民救助案では到底其目的を達することが出來ないで、貧民移動に關聯する新なる社會問題が續出するに至つたのは止むを得ないことであつた。

以上の教會區に於ける貧民労働者に對する管理の方法は、其管理者を使用者側が撰擧して之に當らしめた。其結果として貧民労働者は其管理者階級の爲めに有らゆる不利益を蒙る。其反對に管理者側は其貧民労働者から蒙る負擔を出來る丈之を隣の教會區に負擔せしむるやうな利己的方针を取つたのである。

其故に當時の教會區の間には、絶えず競争と争闘が起つて之を仲裁することが既に社會問題を惹起する因となつた。

當時の貧民問題と關聯して起つた處の重要な社會問題の一は貧兒問題であつた。機械工業の發達に伴つて幾千幾萬の労働者が一時に都會地に集中した結果、其

労働者の兒童達は全く家庭から見捨てられ文字通りの孤兒に成つてしまつた。労働者の父母から見放された幾多の兒童は、家庭的にも孤兒であると同時に、社會的にも孤兒であつた。往昔は保隣の道德がよく行はれて、家庭的の孤兒も隣人が必ず之を救済した。然るに今や機械工業の發達に伴つて、極端なる個人主義が行はれ、自由労働者は唯己を顧みるほかに他人及び隣家を顧みるの暇が無くなつた。かのトーマス、コラムは當時ロンドンに於ける貧兒の死亡率の多きを憂ひて、遂に一千七百四十二年にフワンドリング病院を設立するに至つた。

其他、當時の貧兒問題を起すに至つた大なる關接的原因として、一千七百八十九年の佛蘭西革命を數へなければならぬ。又此革命と同時に英國は埃普二國と同盟して、佛蘭西革命に當つた爲めに、當時マンチェスターに於ける多數の労働者が此戦ひに兵士として臨場した結果、又もや多くの孤兒が社會一般から

放抛せられるに至つた。尙之に加ふるに英國に於ける一千七百九十四年及び九十五年の兩年は氣候不順の爲めに農作物の非常な凶作の歳であつた。之を機として又もや貧兒問題が益々社會の水平線上にあらはれて來た。

以上の貧民問題並びに貧民問題の續出した結果、當時議會に提出せられ且つ通過を見た法案は非常に多數に上つた。例へば、労働賃銀最低率法案とか、又労働賃銀の穀物價格に比例する法案とか又は貧兒を多く有する労働者の保護法案の如き、種々なる法案が頻りに通過を見た。其結果は多少社會問題を緩和するに効果はあつたけれども、それも唯一時の事柄であつて、時代の趨勢は如何ともする事が出來ない。換言すれば、是等の法案は時代の大勢を根本的に救済する方法とかでは無かつたのである。

社會問題としての貧民問題に比して劣らざる大なる問題は、當時の奴隸賣買問題（I）であつた。又此奴隸賣買問題は功利主義の運動を促す上に大なる動機

となつたものである。

奴隷賣買の事實は東西洋共に古くから行はれた處であつて、英國に於ては、海外植民事業の盛になると同時に、非常な勢を以て行はるゝに至つた。殊に第十八世紀に於て其極に達した。其と共に世の識者の奴隷制度に對する非難が又次第に顯著に成つて來た。就中、クラークソン及びビショップ、ヘーター及びビショップ、ワバートンの如き、又當時の文學者詩人の如き人々から、人類感情又四海同胞の思想から奴隷制度反對の宣傳が行はるゝに至つた。就中有名な彼のトーマス、デー（一七四八年—一七八九年）の「死滅の黒奴」（一七七三年）の著が現れて以來、當時の世道人心を刺戟した事は非常なものであつた。殊に奴隷廢止の實行に移つた最初の名譽はグランヴァールシャープ（一七三五年—一八一三年）に歸せなければならぬ。當時シャープは奴隷廢止會々頭となつて旺に活動した。而して其廢止會の委員は主としてクエーカー宗派の

人々であつた事も大に注意す可き事である。此時代の博愛運動にはクエーカー宗の人々が必ず關係して居つた。クエーカー宗は一面非常に實踐的で、他面非常に神秘的信仰を持つて居つた。クエーカー宗の人々には斯る社會問題の爲めに蹴起したのは、前述のクラークソンの著述によつて刺戟せられたからである。一千七百五年には最初の奴隷廢止協會が設立せられた。當時の博愛主義者の一般的共通的精神は人類の個人的權利の主張にあつた。従つて、此點にあつて功利主義的思想や精神が當時の奴隷廢止運動のうちに隱密に醗酵しつゝあつた事が想像せらるゝ。

前述の貧民問題、及び貧兒問題、又此處に述ぶる奴隷廢止運動の根本精神を考察すると、皆共通に個人平等、個人の權利及個人的幸福の均等、及び幸福の量的考察が其中に深く含蓄せられて居つたと云ふ事が出来る。云はゞ、此時代精神は一方に於て宗教的には博愛運動となり、他方、思想的には功利主義となつ

た事は自然の數であつたのである。

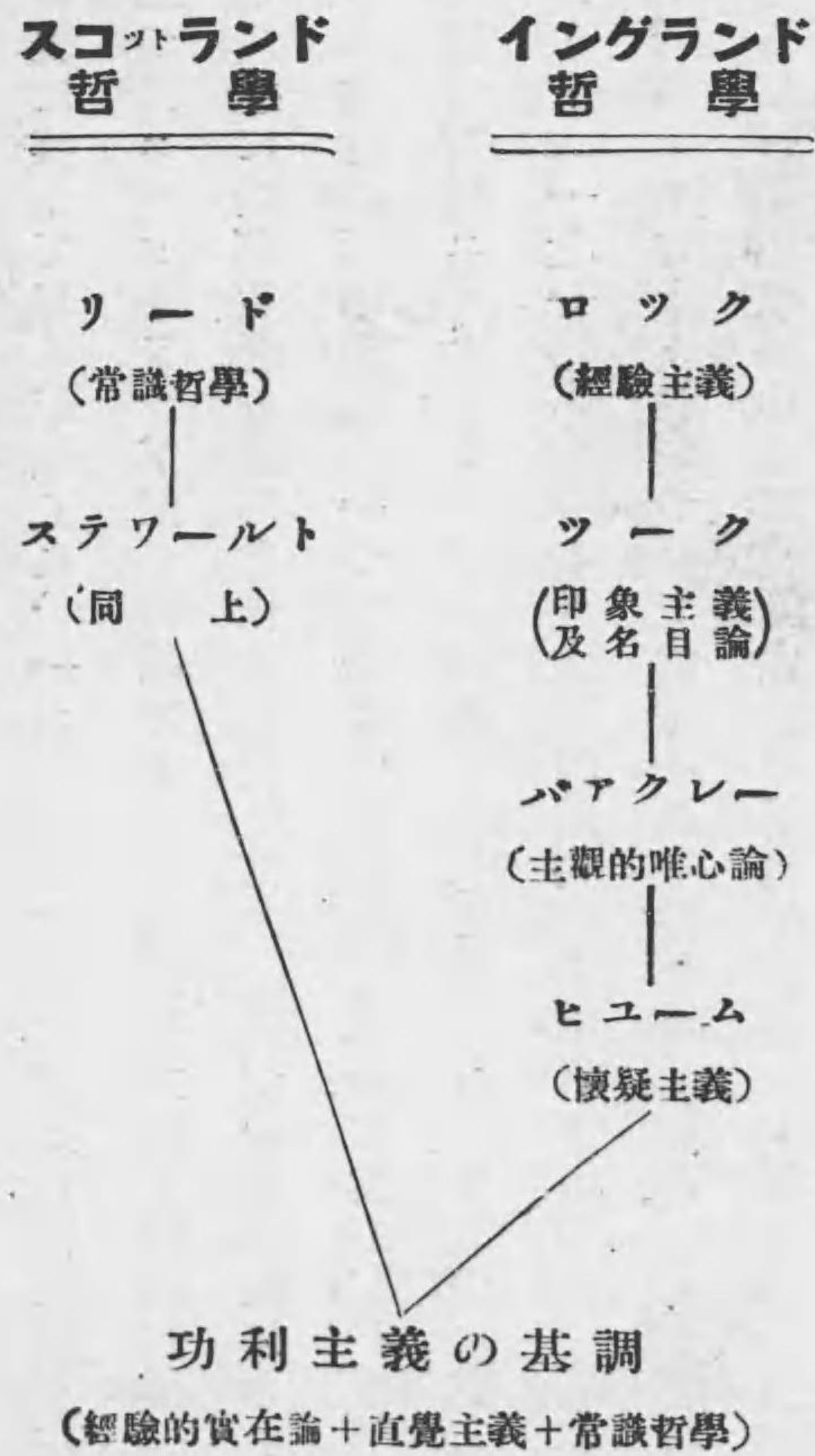
今一つの大なる間接の社會問題、就中、政事思想の問題となつたのは彼の佛蘭西革命の齎ち來たらしめた當時の歐洲一般社會問題であつた。當時、佛蘭西革命が英國の政事思想界に非常な刺戟を與へた。それが爲めに英國の從來の國粹穩健主義も此革命思想の爲めに破壊せらるゝのでは無いかと思はるゝ程であつた。或者は此革命を見て、英國の自由的精神が逸早く佛蘭西に實現したものであると云つて之を謳歌した。又他方に於ては、この佛蘭西革命の急進的過激主義の運動に對して鑿鑿するものも有ると云ふ有様であつた。併し此處にも英國の國民性の大に留意す可きものがある。例へば、英國の當時の政事家の中には、例令、自由主義を平素唱導するものがあつても、此佛蘭西革命の徒らに過激にして、空想的、且抽象的なる運動に對して甚だ不滿を感じて居た。又反つて其等の革命が自由の眞義より隔たる事遠きを歎息した者も少からずあつ

た。此中にはパークの如き、ペインの如き皆それであつて、革命が決して佛蘭西の社會的改善の健全なる道に非ざる事を看破した。殊に、パークの如きは英國憲法の精神を歴史的に、將た傳統的に尊重す可き所以を論じた。又ピットの如き大政事家も、此革命は必ず佛國の衰微を來たすと云ふ事を信じて、佛國の革命軍に對して何等の對策を講せず、徐に其成行きを觀望すると云ふ有様であつた。就中、ルイ十四世が遂に弑虐に會ふに臨んで、一般英國民は益々革命の憎惡する事を知るに至つた。以上の佛蘭西革命が英國々民の精神の上に與へた影響も、功利主義的思想を研究する上には大なる參考となる可きものである。

(I) 一千八百三十四年には英國に於ては奴隸が全く開放せられた。佛蘭西では一千八百四十八年に、和蘭陀では一千八百六十三年に、亞米利加では一千八百六十三年に奴隸の開放が行はれた。尤も米國では一千八百六十五年に至つて完全に開放が行はれるに至つた。ブラジルでは一千八百八十八年、露西亞では終に一千八百六十一年に奴隸に開放が行はれた。

### 第三章 時代思想の背景

功利主義が第十八世期に勃興するに至るにつけては、前章に述べた如き實際的社會生活の背景に負ふ處があつた事は大に注目す可きである。寧ろ功利主義を單なる學術的思想として見ず、一種の社會運動として見る時には、かゝる實際的社會生活に基因して現れたものと見るのが至當であらう。然し、又他面から、此を時代思潮の影響として見る時には、當時の社會一般の思潮が功利主義を胚胎するに、最も好都合の状態にあつたことをも注意せなければならぬ。其故に功利主義の思想的内容を吟味するに當つては、先づ、其功利主義を胚胎するに至つた當時の一般思想を此處に畧述する事が必要であると考へる。功利主義が第十八世期に於て思想界に大發展を遂ぐるに至つた其遠き原因を研究して見ると、當時流行した處の諸種の哲學思想が其根底を成して居る。其



思想と云ふは、一方では、當時のイングランドの哲學思想で、之に對して他方では次第に發達しつゝあつた處のスコットランドの哲學が功利主義の傍系となつた事である。是等が相依つて遂に功利主義の思想をうみ出すに至つたのである。此關係を極めて便宜的に圖解すれば下の如くである。

以上の表に據つて見るが如くに、一つはイングランド派の經驗的實在主義、残りの二つはスコットランド派の哲學である處の直覺主義と常識哲學、此三者が相集つて遂に功利主義の基調を作るに至つた。先づ功利主義にとつて缺く可からざる當時の哲學思想の一つである常識哲學の大體を畧述しやう。

常識哲學は當時スコットランドの哲學者として最も有名であつた處のトーマス、リード（一七一〇——一七九六）が最初の主唱者であつた。其後をリュカ、ガルド、ステュアート等がついで當時の思想界を風靡した。元來、常識哲學と稱せらるゝ哲學思想の中には啓蒙主義の思想が含蓄して居る。換言すれば、常識的の知識を其儘人間の認識の基礎としようとする哲學である。此行き方が功利主義に又大なる影響を與へた。功利主義は一種の啓蒙思想である。則ち常識を本位とし、之に據つて、あらゆる政事、經濟、道德の學的乃至實際的方法を定めようとした處のものである。

尙又、常識哲學の中には近世哲學の一特徴である名目論的思想が含まれて居る。名目論と云ふのは純粹哲學上の實在論の反對である。昔のプラトール等が物の眞の實在は、個々の事物にあるのではなくして、其屬を表はす處の共通概念の裡に實在があると考へたのが所謂實在論である。是に反して、名目論は概念の如きものは總て一つの名目に過ぎない。唯我々の目に觸れ、耳に聞え、有ゆる感覺の上に現はれる個々の事物のみが存在すると云ふ考へである。例へば、人と云ふ概念は一つの總括的の名目に過ぎない。我々は人の實在は經驗によつてのみ知るのである。唯だ、甲と云ひ、乙と云ふ個々の人々から受ける處の感覺的刺戟に據つてのみ、人の存在を知るのである。是が名目論の主張である。此名目論的思想は明に常識であつて、此が常識哲學のまた思想根幹を爲して居る。功利主義は、やはり此影響を承けて、この經驗的事實の外には人間の知識となつて居るものはない。人間が日常の生活をする場合

には其を基礎として其上に社會的に自他の功利を中心として日々の生活を續けて居ると云ふ考である。之も要するに常識哲學の影響と云はなければならぬ。今當時、功利主義の勃興の上に一大影響を與へた處の有名なるホルン、ツークの名目論を此處に紹介して後の参考にしたいと思ふ。

抑々ツークはロツクの弟子であつて、殊に哲學や政治法律に關する知識はロツクから學んだと云はれて居る。併し、彼の名目論者たる立場は常に語學的立場からあらゆる物を説明せんとした處にある。彼の考ではあらゆる心の活動と云ふのは、畢竟言語の運用の結果に歸することが出来る。換言すれば、言語が原因であつて思想は結果であると云ふ事になる。此の考へ方は一種の印象主義の立場であつて、此點は多少ロツクと違つた處がある。彼は何處迄も言語學上から研究を進めて、名目論者の立場を固守した。此考から彼は觀念と云ふものは、總て一つの單語として表はす事が出来る。其故に文法學上に於て

は名詞と動詞が主要なる品詞であつて、其他の前置詞とか、接續詞等云ふものは、唯一種の變則な且つ便宜的に出來上つた單語の結合である。此考へ方は一つの印象主義で、明に名目論的思想である。彼は此立場からして當時の哲學に反對して、云ふには世の中の實際に存するものと云へば、石であるとか、杖であるとか、總て感覺に映づる處のもので、普通、哲學者の云ふ觀念と云ふ如きものは、唯其等の實在物を代表する言葉に過ぎない。従つて昔のプラトール等が云つた觀念即實在と云ふが如き事は全く架空的の事柄であると嘲笑した。殊に物の關係であるとか、範疇と云ふが如き哲學者の最も重づるものは、彼にとつて全く無用の事柄になつて了つたのである。(I)

以上の彼の名目論的思想は當時の思想界に非常な影響を及した。其が證據には、彼れの著書が當時版を重ねたが爲めに、一時に彼に四千磅或は五千磅の利益を與へたと云ふ事を以ても明瞭である。彼の此名目論に共鳴した處の人々



は當時非常に多數であつた。就中、ミルの如きも其影響を受けた一人であつて、ツークの言語學上の考を種々採用する處があつた。〔此ツークの思想はミルに限らず、當時の總ての功利主義の學者に影響して、ツークの考へた思想上に今一段功利と云ふ有力なる考を加へたのが、遂に功利主義と云ふ一種の學派を興する導火線となつたのである。〕

以上述べ來つたツークの名目論的思想が一方に於て功利主義を導くと同時に、其名目論的思想と密接なる關係にある前述のスコットランドの常識哲學が、又功利主義の勃興を促す有力なる導火線になつたのである。前にも述べた如くに、常識哲學は先づトーマス、リードに發して其弟子のステアートに至つて大成し、當時のスコットランドを始めイングランドの思想界を風靡したものである。

當時の思想界がリードの常識哲學を出現せしむる迄には多くの紆餘曲節がある。

つた。元來當時英國の哲學界は、一方には大陸のデカートの哲學の影響が大であり、他方では、ロック、ヒューム等の經驗派の哲學が榮えて居つた。是等の哲學は其いづれも常識を逸する嫌ひがあつて、我々の日常の常識的直覺を無視する傾向が強かつた。其結果、勢ひ常識其ものを一つの信仰として活かす處の哲學が現はれなければならなかつた。是理由に基て常識哲學と云ふものがスコットランドに興るやうになつたのである。

ロックの哲學思想が如何にしてヒュームに進み、其ヒュームの思想が遂に絶対懷疑主義に陥つたかと云ふ事、並びに其の反動で改めて人間の常識的信仰を重んずるリードの考へが、如何にして現れたかと云ふ事を少しく述べて見ようと思ふ。

抑々、ロックの哲學は後の經驗派の一般の思想と比較すると、未だ多少、實在論的傾向が残つて居つた。例へば、ロックは物の性質には二つあつて、第一

性質、第二性質是であるとした。第一性質と云ふのは是を觀察する者の主觀を離れて全然獨立に存するものであるとした。例へば物の可動性や、可分性と云ふが如きものは第一性質であつて、是等は人間の主觀的感覚に關係なくして獨立に存するものである。是に反して、第二性質と云ふものは常に人間の感覚と關聯して存在するものである。例へば、物體の色とか、香とか、音、味と云ふが如きものは即ち第二性質であると説明した。併此第一性質と第二性質との區別は、パークレー及びヒュームに至つては遂に皆人間の主觀的觀念に歸して了つた。其結果、絶對的の懷疑論が生まるゝに至つたのである。

併て以上のヒュームの懷疑的思想は、單に人間の認識を主觀的にのみ見たのであつて、客觀的の確實性と云ふ事を殊更に捨て、顧なかつた嫌ひがある。従つて其結果は我々の日常常識の信念から見て、認識の積極的方面が無視せられ、

單に消極的のものとなつて遂に懷疑主義の説に陥つたのである。此消極的の結論を更に積極的のものとするに至つたのがリードの常識哲學であつた。リードの考ではロック以來考へられて來た處の人間の觀念と云ふものは其自から認識の確實性を持つたもので、ヒュームが云ふが如くに其觀念さへも迷妄のものとは考へられない。寧ろ、其觀念の確實性を證明するのは常識的直覺其ものである。例へば、此所に物ありと云ふ事は、一方から云へば一つ觀念であり、他方から云へば外界事實の有りの儘の存在を指すのである。此リードの説を更に強く主張したのがステュワルトである。唯、此處に注意すべき事はリード等の主張した處の常識的信念と稱するものは單に感覺的のものと云ふ事は出來ない。唯だ感覺は其信念を造るに一つの契機を與へるものであると云ふ事である。換言すれば、感覺的現象の内に疑ふ可からざる認識の確實性が含まれて居ると云ふ事になる。

要するにリード等の主張した處の常識哲學なるものは、當時のイングラントの經驗派の哲學者が總て哲學上の信念をも心理的に觀察して、遂に極端なる破壊主義、懷疑主義に陥つたものを慨して立つた處のものである。イングラントの經驗派の云ふ處に従へば、從來の宗教的信仰も、哲學的信念も、倫理上の根本觀念も遂に破壊せらるゝ事になる。しかし是等の有らゆる宗教的・道德的信念は吾人の日常の直接經驗に訴へれば何等疑ふ事の出來ない確實性を持つて居る。しかも、其確實性は決して單なる感覺ではなく、「健全なる常識」(II)から直覺的に現れ來たるものであると云ふ事を主張した。かの獨逸の哲學者シヨーペンハウエルが、リードの以上の説を指して後のカントの説を少くも消極的に説いたものであると云つたのは至言である。何となればリードの説は人間の認識的の直覺力を尊重した説であつて、カントも又是としく均しく認識の直覺主義を唱へた人である。唯だカントの違ふ處は、所謂綿密なる批判主義

の上に至つた點が、カントをしてリード以上の偉大なる哲學者とならしめた所以である。之を要するにリードの直覺説は人間の常識的の能力の中に、恰も化學の原素の如くに疑ふ可からざる直覺的原素があると云ふ事を確信して、之を以て直に有らゆる事物を説明せんとしたのである。以上の常識哲學の思想が何時の間にか功利主義の思想に流れ込んで、道德上の常識的直覺主義を起す大なる動機となつたのである。功利主義の道德説は要するに日常經驗の直覺を基としたもので、此常識的直覺力を無視しては功利と云ふ事も成立せなくなるのである。之を以ても如何に功利主義に對するリードの影響が強かつたかと云ふ事が分る。

リードの後繼者であるステュワルトの思想も、かのリードと同一に功利主義の上に大なる影響を與へた事は言ふを待たないけれども、多少リードと趣きの違つた關係を功利主義に持つて居る一點は特に注意すべき事柄である。元來ス

テユワルトの哲學思想はスコットランド派ではあつたけれども、稍、イングラ  
ド風の經驗説が彼の思想の内に混入して居つた。換言すれば、リードの學説と  
比較すると、ロックやヒュームに稍々近づいて居る形跡があつた。其結果彼  
の思想は一種の名目論思想であつて、リードに比較すれば遙に唯物的乃至科  
學的の傾向を持つて居つた。其點では彼のツークの名目論と餘程一致する處が  
あつた。其等の點からして彼の思想は一面から見ると自然主義的傾向を持つ  
て居つて、常識的に此自然的の感覺的事物の存在を確信し、是に據つて彼獨特  
の哲學組織を作つたものである。其故に、彼の説は一言にして云へば、唯物  
的、直覺的常識哲學と云ふやうな風があつた。此點は又功利主義に間接の影  
響を與へて居る。即ち其點は功利主義の大體の思想が唯物的であり、又自然  
主義的であるのでも知らるゝのである。

以上の如くステユワルトの一般哲學思想が功利主義の全體の上に影響したけれ

ども、單に倫理説丈けを探つて見るならば、彼の説は餘程功利主義とは違つた方  
向に向つて居つた如く見ゆる。即ち彼の道德説はやはり一種の直覺的であつ  
て、道德其ものゝ獨立性を確信し、特に其道德が他の原因に基くと云ふやうな考  
はなかつた。例へば、道德は功利と云ふ原因に依頼して現れると云ふやうな  
考はなかつたものである。其點では寧ろ一種の良心説を信じて居つたのであ  
る。彼のバトラーやハッチソンの道德感官説に近い學説であつたことも其に  
基因するのである。殊にバトラーの良心の優位性説を是認したと云ふことゝ、  
又ハッチソンが道德感官を第二次性と見た事に不満を感じて居つたのは大に留  
意すべき點である。彼は道德上の判断は幾何學上の公式の如く必ず誤謬無く  
現れる。殊に其道德的判断は一種獨特の道德的感情を結合して、直覺的に現  
はれるものであると云ふ事を信じたのである。しかし、彼の以上の直覺主義  
の倫理説も次第に思想上の變化と共に、多少とも功利主義に近づく傾向を現は

すに至つた。例へば道徳的判斷と云ふものは假令直覺的であつても、矢張其判斷の最後の標準となる可きものが必要である。此最後の標準と云ふ事に想ひを廻らした時に、彼は次第功利主義に近づいて來た。即ち、直覺的判斷の根底には、社會の幸福、自他の幸福と云ふやうな標準が無意識に横はると云ふ事を認めざるを得なかつた。其點は後の功利主義が意識的に功利と道徳とを結合したに反して、唯だ無意識的に兩者の結合を認めたと云ふべきであらう。以上述べ來たつた處は功利主義の思想的先驅と成つたスコットランドの常識哲學の大體と其思想が如何なる點に於て後の功利主義の上に影響したかと云ふ事の大體に就て述べたのである。今後は其常識哲學 殆ど反對の立場にあるロック及び其以下のイングランド派の經驗主義の哲學が又他方に於て功利主義に偉大なる影響を與へた點に就て少しく述べて見やうと思ふ。言はゞ當時功利主義と稱せられるものは、以上の二つの時代思潮の流を綜合して現れた處

の思想であつたのである。

抑々、ロックの哲學思想は一言を以て盡す事は困難であるけれども、其思想の起る哲學的動機を研究してみると、彼の思想の根幹が何れにあつたかと云ふ事が明瞭になる。彼の考では、從來の哲學者が殆ど異口同音に述べた處の先天觀念の迷妄を打破し、更に新らしき心理的、また科學的眞理を發見する事が彼の目的であつたのである。此主旨からして、彼が大膽に反抗的態度を執つた事の第一は從來の宗教や又倫理が人間に直覺的又先天的の道徳觀念があつて、是が有らゆる道徳的の是非を判定するものであると云ふ事を駁撃し、道徳的の判斷と雖も敢て斯の如き神秘的の能力ではなくして、心理的の事實に外ならない。其心理的事實と云ふのは、人は快樂を欲し幸福を求め是に反して苦痛を避け禍を退くと云ふ心理的事實である。乃ち道徳的の行爲と雖も要するに此心理的原理に基いた派生的現象に過ぎないのである。換言すれば、善惡と云ふ事

Locke

も一つの人間の欲求的作用から起るのである。乃ち善は快を意味し、悪は不快を意味するに他ならぬ(III)世人は特に利益快樂を離れた徳を人間に許して居る。而して其徳たるや始めから快不快に關係なく、其れ自ら獨立のものとして考へて居る。併し其れは大なる誤であつて、寧ろ徳それ自らが自他の幸福を持ち來らす爲めの手段であると同時に、良心と稱して居るやうなものも社會一般の幸福を持ち來らす處の行爲に對する世人の輿論的反響に過ぎないのであると考へた。此考は明かに功利主義の先驅となる考であつて、其意味に於てロツクは歴史上功利主義の先驅と呼ばれて居る。

以上ロツクの説からして倫理説は次第に科學的色彩を帶ぶるに至つた。從來の道德説は尙半ば宗教的雰圍氣に包まれて居つたものが、是以來經驗派の學者に據て益々科學的の取扱を受くるに至つた。其結果として、例ば社會の道德は永久不變のものであると思はれた事柄も、其時代の環境と、其民族生活の

様式の變化と共に其内容が次第に變遷するものであると云ふ事が次第に是認せらるゝに至つた。過去の道德にあつても宗教的の神の法則と云ふが如きものは一定不變のもの如く思はれて居つた。併し是とても決して萬古不易のものでは無く、唯歴史上から見て其宗教的道德律が何れの時代の社會生活に對しても比較的多大の利益を與ふるものであると云ふ事の爲めに割合に時代の變化を蒙らなかつたまでである。元來宗教が何時の世になつても世人の尊崇を受けると云ふ事は矢張一種の功利的因果律に據つて支配せられて居るものと見る事が出来る。何となれば地獄の恐怖と天國の歡樂とが、人々をして自然に宗教に趣かしめ神を固く信するに至らしめたからである。

以上はロツクの學説と功利主義の關係を述べたのであるが尙<sup>右</sup>ヒュームの學説と功利主義の學説との關係を述べて見よう。ヒュームは倫理學に對しては飽くまで科學的の立場を採つて、倫理學を心理的事實に據つて説明しようとした。

其故に、彼にとつては道德現象と云ふことは、之を心理的に見て嘉納と排斥との心理的事實に過ぎないのである。其故に、倫理學の研究は此二つの場合を統計的に研究すればよいのである。決して、抽象的の理論ではなくして具體的事實の研究である。従つて此研究は飽くまでも實驗的事實の研究である。従つて此研究は飽くまでも實驗的方法に據る事が最も便宜であつて、其實驗的方法に據つて、實際の場合を比較研究し、其處に客觀的の格律を造ればよいのである。同時に是より確實なる實際道德は無いのである。

以上のヒュームの倫理的立場に對して最も多く問題になるのは、人間の理性の問題である。元來經驗主義の哲學者はヒュームに限らず、多く理性を輕視する傾きがある。ヒュームも此點に於ては人間の理性と云ふものを特に第一次的のものとは見て居ない。寧ろ、心理的事實としては感情が元で、其感情に左右せられて道德的の判断が現れて來る。換言すれば理性の働きは道德的

感情に隨伴して現はれるものである。其故に特に理性と感情を始めから明瞭に區別する事は出来ない」と云ふ考である。之を要するに、彼の倫理説は心理的事實を基礎として、科學的研究法を以て進めて行つたものである。

前述のヒュームの倫理説は勢ひ道德主義として功利主義を誘導せざるを得なかつた。即ち道德的の判断を惹起する處の道德的感情と云ふものは、矢張或一つの原因が無くてはならぬ。其原因又は動機と見る可きものは一般人類の快を欲し苦を退くと云ふ根本的心理原因に溯らなければならぬ。即ち快樂、幸福を標準とする處の道德説が成立せなければならぬ。勢ひ、自他の幸福を多く持ち來らすのが善であり、自他の禍を多く持ち來たすものは惡であると云ふ功利主義の原則に接近せんとするの學說傾向であると云ふべきである。

ヒュームは更に進んで道德の變化性と云ふ事に就いて主張した。此點は前述のロックと略ぼ同様の見である。又マンデヴキルも是と同一の意見を持つて居

つた。即ち道德は自己の社會的環境に據つて其内容を變化すると云ふ事である。即ち道德には一定不變と云ふ事は決して無く、國民的生活に由つて變化があり、時代の推移に由りて道德的標準がまた推移する。併し、其れも全く法則無しに變化するのではない。或一定の法則の下に推移して行くのである。其法則とは一言で云へば、社會に對する有用性の法則とも云はる可きである。是を詳言すれば、其一定の道德が其社會生活に有用であればある程、其道德の根據が鞏固になる。是に反して其有用性が薄らぐに従つて、新たな道德が発生して来る。此關係は物理現象に於ける重量と加速度との關係の如き極めて客觀的のものであると云ふ考である。ヒュームの著書「人間の悟性に關する吟味」の内容は著しく科學的になり、從來の神祕的説明から脱却するに至つた。ヒュームの前後には神祕的の倫理説を説く學者があつた。アダムスミスのやうな比較的科學的傾向を持つた學者ですらも、未だ多少道德的説

明に宗教的傾向を帯びしめたをことは事實であつた。

其他パトラーの如きに至つては、就中、直感的又宗教的の要素を其學說の内  
に含ませて居つた。例ば人間の悔悟感情の如きは、己の不正殘虐に對する造  
物主の與へた罰則其ものであると云つたやうな考を持つて居つた。然るに  
ヒュームに至つては、道德上の悔悟の感情は、結局、己及び他人に對する損害  
の反響である。決して神祕的の事柄ではないと云ふ考に到着するに至つた。

ヒュームの自然主義的、經驗主義的倫理説に於ては、犠牲獻身の徳の如きも  
畢竟自己に對する間接の利益に環元する事を證明するにあつたのである。元  
來、犠牲或獻身の徳と云ふものは社會の發達から現はれて來たもので太古の如  
く人間が個々離々に生活をして居る時には、斯の如き獻身犠牲は必要で無かつ  
たのである。然るに人類が社會を組織するに及んで、無意識ながら個人間に一  
種の契約が結ばるゝに至つた。而して其契約が間接に自己の生命安全を計る



大切なる條件となつた。従つて其社會的契約を破壊する事は直接ならずとも、間接に自己に不幸を齎らす事になり、道德的には後悔の感情を習慣的に涵養するに至つたのである。斯の如き説明に據つて、ヒュームは徳を二種に分つた。一つは人爲的道德。今一つは自然的道德。前者は主として犠牲獻身の徳の如き、個人が社會に對する義務の精神から出來たものを指し、後者は個人が己自らに對する利益幸福を目的とする徳を指して云ふのである。以上のヒュームの倫理説は當時の一般の人々の常識によく適合した爲めに、深き印象を此時代の人々に與へたものである。其結果、功利主義の勃興には非常に有力なる動機となつた。併し其説は未だ學説として微細の點に及ばず、理論としては發達す可き餘地があつた。殊に、後來、功利主義として發達する爲めには其功利的道德の標準をヒュームの説以上に、社會的發達上に求めなければならなかつたのである。元來、ヒュームの學説は全體として尙個人主義

的色彩が強い。従つて人爲的道德と云ふ事を唱導しても、未だ眞の社會生活の渾一的性質を充分に認めるに至つて居ない。其點に於て功利主義は其學説が個人主義に胚胎して居るけれども其學説の根本的觀念は遙く社會的であつた。従つて功利的の打算法の如きも社會全體を實際的に研究した上でなければ、確定する事は出來ないのである。以上の點からしてヒュームの云つた處の科學的研究と云ふ意味は功利主義には單に心理學の意味に止まらずして、更に社會學の意味を加ふる事が必要なる事になつて來たのである。其點に於て功利主義はロックやヒュームの倫理説に一步を進めたものと云ふ可きである。以上は當時の思想の大體を述べたのである。是を要するに功利主義の歴史的に胚胎する處の一つは、スコットランド哲學系統の名目論的思想と直覺主義とにある。他は是に加ふるに、イングランド哲學の系統の經驗主義とである。是の二者の流が交互に功利主義の上に影響を與へた。就中前者からは常識的の

要素と、直覺的の要素を酌み取り、後者からは唯物的評價の實際的方法を學んで遂に大成するに至つたのである。

(I) J. H. Tooke(一七三六一一八二一)は一方に於て學者であると同時に政事家であつた。就中有名なのは言語學者としてであつた。彼は名詞に就ては詳細論じたけれども、動詞に就ては残す處が多かつた。特に動詞に關する論文は、何故か彼は生前燒き捨てたと言ひ傳へられて居る。若し彼が動詞の性質を言語學上から充分に研究したならば必ず哲學上の範疇論にも想ひ及んだであらう。

(II) リードは常識直覺が認識の確實性を持つて居ると云ふ事の例證として、(i) 人格の普遍性又(ii) 意識の確實性等を唱へた。

(III) Lock, Essay, book i, Ch III, sec. 3. 參照

#### 第四章 ゼルミーベンサムの生涯

ゼルミー、ベンサム(一七四八一八三二)は幼少の時代に既に早熟の人であつた事が證明されて居る。三四才の時に既に机に凭つて書見をしたと言はれて居る。四才には既に拉典語を學び、五才九ヶ月にして拉典語を書いたと、彼の父の残した話の内に傳はつて居る。斯の如き有様であつたから、兩親は子供の早熟を悦んで居つた。併し不幸にして彼は蒲柳の質で、屢々病氣のため兩親に心配を懸けたと云はれて居る。

一千七百五十五年には彼はウエストミンスター校に送られ、其處で希臘語及び拉典語を學んだ。同時に、佛蘭西語を學んで非常に上達したと云はれて居る。一千七百六十年にはオックスフォード大學のクインスカレーヂに私費生として入學した。一千七百六十三年にはBAの學位を得て歸宅した。彼がオ

13. Backstone

ツクスフォード大學に在學した間に、最も思想上に批判的影響を受けるのは、ブラックストーン教授(I)であつた。彼の當時の講義の重なるものはイングラント法典の註釋であつた。此講義を聞いたペンサムは寧ろ批判的に影響せられて、後來彼が法律上の研究を繼續したのも要するに彼の講義の感化であつたのである。

一千七百六十五年父が後妻を迎へて以來、彼は次第に父から離れて行つた。一千七百六十六年にはM Aの位を得一千七百六十七年には父が兼てから希望して居つた處の大法官に就く爲めに、オックスフォードを去つてロンドン市に歸つた。しかし彼の實際事務家としての大法官の職は寧ろ不適任で其がため遂に父を失望せしむるに至つた。

ペンサムは實際家ではなくして、矢張思索家であつた。彼は比較的青年の時代から既に當時の新思想家であつた處のロツクや、ヒュームや、モンテスキュー、

エルヴチユース、ベツカリア、パリンググストン等の影響を受けた。ロツクは當時最も世の中に持てはやされた哲學者であつて、從來の因襲的精神を捨て、自由思想を唱道した。此ロツクの影響を受けたペンサムは又勢ひ新思想家たらずるを得なかつた。又ヒュームからも大なる感化を受けたが、就中、エルヴチユース(II)からは法律學の資料的方面に影響を受けた。ロツクからは法律の原理に關する思想上の影響を蒙つた。ヒュームからは彼の有名なる著書である人性論から倫理學上の影響を受けた。ペンサムが斯の如く當時の多くの哲學者や法律家の思想の影響を受けて、次第に彼獨特の功利主義的思想を助成したのである。彼の功利主義の基礎的原理である。「最大多數の最大幸福(III)は善惡是非の標準である」と云ふ者は、就中ベツカリアや、ブリストリー(VI)の思想から採つて來たものである。併し彼の功利主義的道德思想はハツチソンからも感化を受けて居る。又當時のヒュームの功利的思想を今少し

く數量的に計算して、幸福快樂の比較的標準にしやうと考へたのであつた。尙又ベンサムは前述の功利主義の根本原則を以て當時世間に有名であつたニュートンの物理学の法則に比較して、衷心大に歡喜を感じて居つた。是を以て觀るとベンサムの研究法が常に科學的態度にあつた事迄も想像せらるゝのである。

一千七百七十六年には彼は先づ「Fragment on Government」を著はした。アダムスミスの富國論や、其他ギボンの著書等が世間の紙價を高からしめた時代であつたけれども、彼の此著書も次第に世人の注意を惹起するに至つた。此著に先づ注意をしたのは彼の有名なるロード、セルバインであつた。セルバインは哲學に興味を持つた當時の政事家であつて、當時の學者のフランクリンや、ブリーストリーの如き人々とも交際したが、此事あつて以來、就中、ベンサムと親交を結ぶに至つた。其關係からベンサムはセルバインの紹介を以て、

當時の政事家ダンニングや、ビット等とも親しく交るに至つた。

以上のベンサムの生涯によつて考へて見ても、彼は一個の思想家であつて、實務家としての手腕は必ずしも冴えては居なかつた。實務家としては彼は寧ろ失敗した。然らばとて又彼は思想家としても決して純粹の學者肌の哲學者では無かつた。寧ろ當時の政事、經濟、法律に關する實際的興味を持つた思想家であつた。其點に於ては、現代の社會改造論者の如き位置を占めた人であつた。彼の一生の事業は先づ當時の歐羅巴諸國の法典編纂に従事した事。今一つは當時露西亞より新監獄法を輸入した一事であつた。其他に於ては法律政事哲學一般の研究者であつた。

彼の有名なる監獄制度改良の起源は、彼の弟のサムエル、ベンサムが當時露西亞に滞在して居つた。それが爲めに彼が一千七百八十五年に其弟を露西亞に訪問した序を以て、露西亞の監獄制度を研究したに初まるのであつた。當時の

歐羅巴の監獄制度は極めて舊式であつたが、此ペンサムの露西亞監獄を視察した結果、大に改むる處があつたと云はれて居る。當時の露西亞の監獄制度は囚人に對して特に授産の方法を設け、一つは生産の目的を果たし、他は囚人の訓育の目的に用ひたのである。當時此制度はエデンボルの監獄に先づ採用せられた。併し例ば英國の如きは保守的思想強く、ペンサムの此新監獄政策を完全に應用するには至らなかつた。それにもかゝはらずペンサムは此制度の爲めに私産を抛つて各國に宣傳したと云はれて居る。就中一千七百九十二年三月父を失つて以來是の囚人政策に専心したと云はれて居る。

ペンサムが一千七百八十九年に彼の有名なる *Introduction to the principles of morals and legislation* を著して以來、彼の名は隆々と世の中に顯れた。

是を機として當時の有名なる政事家、博愛運動家、社會改造家等と交際するに至つた。就中ランズダウンは彼の愛護者であつて、又彼の法律政治の意見を最

も多く採用した人であつた。其等の人々の中にはピットや、ランダスマヤ、ブラックストーン等があり、又友人としては彼の周圍にはコルクホーン、サーエデン、ウイルバホースの如き人々が多數集つた。彼の名は當時既に佛蘭西迄喧傳し、彼を敬慕して來る者が日に増加した。併し彼の日々の生活は極めて質素であつた上に、且つ非社交的であつた。従つて彼の門弟と稱せらるる者は比較的少數であつた。唯、後年彼の全集を刊行した處のデュモンとゼームス、ミルとの二人があつて、其がため後世に至る迄長く其名を傳へらるゝに至つた。

ペンサムの社會改造事業として、先づ屈指すべきは當時の英國を初め中歐諸國の法典編纂に與つた事である。當時彼の著書が中歐諸國に流行し、倫敦を始め、露都や、巴里に於て版を重ねて翻譯せられたのを見ても、彼の思想が天下を風靡したことが證據立てられる。當時、中歐諸國の法典は彼の法律的原

理に由つて至る處改修せらるるに至つた。當時の世界の官憲は彼を崇拜する餘り是をペーコン、ニユートン、アダムスミスに比較をした。

ベンサムは實際的事業から手を退いて、専心學問研究に志したのは、彼の新監獄制度が當時の世間に餘り歓迎せられなかつたのを見て失望した以後の事である。一千八百八年頃には専ら著述に従事した。彼の著述が當時至る處に繙讀せられて、就中、彼の功利主義の原則が世界文明國に採用せらるゝに至つた。中歐諸國はナポレオン一世の敗後社會は全く混亂状態にあつた。其社會の混亂状態を救済する爲めに彼の法律思想と功利主義的原理とが有用に働いた。其他、南米、西班牙、等にも彼の法律的意見が行はれた。即ち是點では一千八百十五年以後の世界の法典は殆ど彼及び彼の學徒に由つて作られたものと云つてもよい。當時、佛蘭西にあつては熱狂的なる革命運動が起り、又其れに對しては英國内に於て保守的運動が始まつた。併しベンサムは是等の運動の執

れに對しても全く無關心で、唯だ博愛運動者の立場にあつて、極めて公平に又理性的に社會を指導した。此ベンサムの態度は又當時の歐羅巴諸國の冷靜なる社會改造實行家の間に大に歓迎せられた。一千八百九年には彼の弟子のデュモンが露西亞の皇帝に招聘せられて法典編纂の事業に預つた。一千八百十七年には同じくデュモンがゼネバに招かれた。ベンサム自身は一千八百二十年及び二十一年の兩年に亘つて西班牙及び葡萄牙の政府から同一の目的を以て招聘せられた。以上の如くベンサムの一生の事業は主として法典編纂にあつた。就中、彼の最も大なる事業は 'Constitutional Code' の編纂であつた。

彼の名を永久に残したのも實は此著述にあつた爲めと云はなければならぬ。一千八百三十二年の五月の十八日に彼は溘然として此世を去つた。ベンサムの名と其事業が後世に傳はるに至つたのは上述した彼の畢生の事業にあつたことはいふ迄もないが、今一つの原因は彼の弟子に有名な人々が居つた

からである。先づ第一に擧ぐべき高弟はゼームス・ミルである。ミルは深くベンサムを崇拜し、彼の學問を宣傳する事を畢生の事業とした。此ミルの努力に刺戟されてベンサムも當時 'Chrestomathic School' と稱する學校を設立して是に由つて當時の上流中流社會の人々を教育した。當時、此舉に參して功利主義の運動を援助したものはブローガム、マツキントツシユ、リイカルト等であつた。ベンサムは是等の事業の爲めに多大の私財を抛つたと云はれて居る。

(I) Sir William Blackstone (一七二三—一七八〇)は父母は倫敦市民で長じて牛津大學に學び、一七四六年には裁判官になつた。然し、執れかと云へば學究的の肌合の人であつたので、後には學者として成功した。一度は牛津大學に於て英國法律を講じ、又著名な英法の註釋を書いた。

(II) Claude Adrien Helvétius (一七一五—一七七七)は巴里に生れ、當時著名の所謂百科全書編纂者の一人で、英國のロツクを祖述し、専ら感覺主義の哲學を鼓吹した。即ち感覺は智識の元で、又人間行爲の動機は主として感覺に基く自己満足であると云ふのである。當時に在つては、斯如き學説は餘りに異端的であつた爲め、終にソルボンヌより破門せられ、著書は全部焼却せらるゝに至つた。

つた。

(II)是の「最大多數の最大幸福」を考へベツカリフ及プリストリから採用した。

(VI) C. B. Beccaria (一七三五—一七九三)伊太利の法律學者、ミランに生まる。有名な著述は *Essays on Crimes and punishments*  
 J. Priestley (一七三三—一八〇四)は唯物主義者で其著述の主なるものは *Doctrines of philosophical necessity*.

### ベンサムの主なる著述

- A fragment on government, 1776. 3rd. ed. 1822.  
 Defence of usury, 1787. 3rd. ed. 1816.  
 An introduction to the principles of morals and legislations, 1789. Rptd. Oxford, 1879.  
 The panopticon or inspection house, 1791.  
 A table of the springs of action, 1817.  
 Constitutional code, 1830.  
 Church of Englandism and its catechism examined. 1817.

The Rationale of Reward. 1825.

The Rationale of Evidence. 1827.

The Rationale of Punishment • 1830

Deontology or science of Morality. 1834.

英訳士達から送られるものとして University College, London & British Museum  
に送られたるものとして編入された

ベンハムの英訳書

C.M. Atkinson, Jeremy Bentham. 1905

F. C. Montague, Introduction to edition of A Fragment on Government. 1891.

欠



# 欠

## 第七章 ゼームス・ミルの生涯

ゼームス・ミルは一千七百七十三年の四月六日に北スコットランドのフォール  
ファー郡に生れた。彼の父は矢張彼と同じくゼームスと呼ばれた人であつた  
が、相當の暮しをして二三人の雇人を常に使用して居つた程の田舎の靴屋であ  
つた。其性質は至つて朴訥な又敬虔な人であつたと傳へられた。母はイサベ  
ル・フエントンと呼ばれて同郡の農夫の娘であつた。此夫婦の間に第一子と  
してゼームス・ミルが生れ。第二子はゼームスよりも二歳下のウイリアム・  
ミル、第三子はウキリアムよりも更に二歳下のメリー・ミルと呼ばれた娘であ  
つた。母はゼームス・ミルが故郷を去る前に既に死し、父は後年中風症を病  
ひ、加之、友人の爲めに破産の難に會ひ、彼の弟のウイリアムは彼に先だつて  
夭死し、妹のメリーは父の友人グリーングと結婚した。父は一千八百〇八年に

死し、其が爲めに彼は父の残した負債の償却に苦しんだと傳へらるる。ゼームス・ミルの幼時は詳に知るに由ない。併し秀才であつた事は凡そ想像される處であると彼の傳記の著述者ペインに依て述べられて居る。ゼームスの子供の時は就中、讀本科、作文科、及び數學科に長じて居つた。母も密かに其才を愛して遠く故郷を去つて學業修得の道に就かしむる意志を持つて居つた。其等の事から彼は比較的幼年及び青年時代は父の家業を補助する處が少なかつた。却て弟のウキリアムの方が父の家業を繼ぐやうに見えた。

ゼームス・ミルは凡十七歳にしてエデインボロ大學に入學した。當時十七歳の弱年で同大學に入學した事は餘程罕であつた。彼の大學に於ける成業は著しく進歩した。後年彼の忘る可からざる歲月であつた。同大學に於て彼の思想上に影響を與へたのはデユガルト、スチュアルトの哲學の講義であつた。彼が後年知人に送つた手紙の中にも、年久しくエデユンボロ附近に滞在しステ

ユアルト師の級に於て彼の講議を聴く事は余の樂とした處であつた。其後ピットの講演も聴いたが、未だ嘗てステユアルト教授の其の如く雄辯なるものは聴かなかつた。其がために余の一生涯の研究の趣味は彼に負ふ處が多い」と書いたのを見ても、如何にステユアルト教授に感化されたかといふことが明瞭である。エデインボロ大學を卒業した後暫く牧師の役を勤め、後、家庭教師を長く續けた。其後彼がエデインボロに滞在して居る間に例の佛國革命が勃發した。其が爲めに英國の有志間には此佛國革命が一大問題に成つた。併し當時彼が果して其革命に對して如何なる考を持つて居つたかといふことは甚だ明瞭でない。併、此時代は彼はファグソンやヒュームの政治哲學を研究して居つた事は事實である。

一千八百〇二年にゼームス・ミルはロンドンに赴いた。ロンドンに於ける生活は彼の公生涯の第一歩であつて、當時の政治問題に對して彼は非常に興味を

感じた如くであつた。併、遇々彼が下院に於ける演説を聞いた時に、寧ろ其下劣なるに驚いた。ロンドンに在るの日の最初の哲學上の論文は、かのベルシヤムの「論理及精神哲學の入門」に對する反駁であつた。此駁論は後に出版せられたが、其大體の主意とする處は、ベルシヤムが哲學より先に論理學を必要とする意見に對する駁論であつた。彼の論文は思想的に非常に發達したものであつて、其が爲めに當時非常に有名になつた。其後、彼の論文が、世の中に現れ初めたのは主として一千八百〇三年に發刊された「リテラリー・ジョナアル」誌に彼の寄書が續々發表せらるゝに至つてからである。彼の思想を研究する爲めには従つて此雜誌が大なる參考となる。

彼の結婚はロンドンに來て間も無くビユーローと云ふ一家族と熟懇の間柄になり、遂に其家の娘ハリーと一千八百四年に結婚した。其間に生れた第一子は有名なるジョン・ステュアルト・ミルであつた。一千八百〇八年以後はミル

の最も社會的に活躍した時代である。此間にベンサムとも交際し著述論文を多く物し、又社會的實際事業にも従事した。ベンサムとの交際は凡一千八百〇八年以後の事であつて、一千八百十四年にはベンサムの住居の近隣に移轉して益々親交を續けた。一千八百十八年にはベンサムの紹介で彼の有名なりカルド(I)とも交際した。彼の此ジョン・ステュアルト・ミルの自叙傳に據ると彼の幼少の時代に父ゼームス・ミルの處に往來したりカルドを熟知して居る。そして彼等兩人の談話を聞いて非常に興味を覺えたと記して居る。一千八百十年の頃には彼の博愛運動で有名であつたウキリアル・アレン(II)とも交際した。遂にはアレンの資本で「博愛運動者」<sup>フィランソロピスト</sup>と稱する雑誌を發刊し、ミルは専ら之を管理し、當時の博愛運動の爲めに協力した。

ゼームス・ミルはベンサムの思想上の影響を受けて従來の宗教的信仰を放棄するに至つた。彼が郷里スコットランドを出る頃には未だ溫和なる信仰を持続

してゐたけれども、是以來全く宗教に對して反抗するに至つた。

ミルは當時出版せられた百科全書の追補に執筆した。其頃より前述のリカルドとは益々親しくなり、經濟に關する理論に就てはリカルドを師とした。後リカルドをして議員に立たしめたものも主としてゼームス・ミルの慫慂に基くのであつた。其と交換に又リカルドはミルの功利主義を辯護した。一千八百二十一年には彼の有名な「ポリティカルエコノミクス經濟俱樂部」がリカルドの家に初めて開かれた。此俱樂部の榮えると共にミルは當時有名なる多くの政治家及び社會改造論者と相知るに至つた。其内には彼の有名なる人口論のマルサス。亦グロート等も居つた。

ゼームス・ミルの哲學は哲學としては然のみ幽遠なものではなかつた。彼は寧ろ、哲學者と云ふよりも、ジョーナリストとして見る可き人であつて、彼の哲學思想はステイワルト及其門下のブラウンの影響を受け、又ホツプスからも

Ricard.  
J. Mill  
Marx.

深い印象を得て居る。其他ロックや、ヒュームや、ハートレーの思想からも影響せられたものがあつた。其他には多少佛蘭西のコンデイヤークの思想も加はつて居つた、獨逸のカントに就ては充分理解する處が無かつた。彼の著述の「分析論」は彼の博學強記なる事を證明するけれども、餘り哲學的考察は深く加はつて居ない。此書は歿後彼の子ジョン・スチュワルト・ミルに依て再版せられて面目を一新するに至つたと言はれて居る。彼は一千八百三十六年六月の二十三日に逝去した。

(I) ヘンサムは嘗て下の如く言つた

I was the spiritual father of Mill and Mill the spiritual father of Ricardo. (Bentham, works, p. 498.)

(II) William Allen(一七三〇—一八七三)はクエーカー宗の一信徒であり又一化學者でもあつた。彼は非常な人道論者で當時の博愛運動ニハ私財を抛つて狂奔し。就中奴隸廢止運動に熱中した。彼は一時オウエンとも親交があつたが後絶交したと言はれて居る。(Stephen, English Utilitarians, p. 11.)

### ゼームス・ミルの主要なる著述

Elements of Political Economy, 1821.

Essays on government, (百科全書中の補遺として記されたもの) 1825.

Analysis of the phenomena of the human mind, 1829.

(本書は一八六九年、子息ジョン・シムチエプート・ミルに依り改訂せる)

A fragment on Mackintosh, 1835.

### ゼームス・ミルの研究書

A. Bain, James Mill, a biography, 1882.

G.S. Bower, Hartley and J. Mill, 1881.

## 第八章 ゼームス・ミルの心理説及び倫理説

ゼームス・ミルの倫理説を窺ふ前に彼の心理説を考察することが必要である。何となれば其倫理説も溯れば彼の心理説に源を發するからである。大體から云へば彼の倫理説はベンサムの學説を出づる事餘り多くはない。却て、彼の心理學説の方はベンサムよりも遙かに研究を進めたものである。一時、歐羅巴の學界を風靡した聯想派の心理學の起源は蓋し、ゼームス・ミルの研究に求めなければならぬのである。

彼の心理主義として所謂人間の行動を規定する心理的原理の説明は、前述の「人間精神の現象の分析論」の内に詳細記されて居る。之が所謂聯想派の心理説である。該書の内容は先づ彼の師ベンサムの心理主義的思想の祖述であると同時に其ベンサムの學説を更に詳細に學的に基礎づけたる處のものである。

該書は後年彼の子息ジョン・スチュアート・ミルが更に再版して公にしたもので、當時の學界を聳動せしめたものである。即ちジョン・スチュアート・ミルは一千八百六十九年に至つてジョージ・グロートや、ベインや、又フィンドレーター、並びに自己の精細な註脚を附して上梓したものであつた。ゼームス・ミルの心理學及び倫理學に於ける研究法は、從來の演繹的研究を避けて専ら歸納法を用ひたものであつた。抑も此歸納法は當時進歩しつつあつた科學の唯一の研究法であつたが、當時精神上の學問にも益々此方法を用ひるに至つた。彼のベーコンは從來の哲學が一種偏見に囚れて其が爲めに希臘の昔より今日に至る迄、何等の進歩を見ることが出来なかつた事を嘲つて以來、此ベーコンの意見に従つて精神科學者は専ら此歸納法を用ひるに至つた。殊にロック以來は哲學は益々心理學的研究に基いて科學の範圍に侵入して來た。如斯、科學的歸納法が一般哲學の上にも用ゐらるゝに至つたのは、主として當

時の物理學が原子論の上に立つて、物理的現象を原子の運動に據つて説明したのに比らへんとしたのである。斯る考から一般心理學も、又其を基礎とする倫理學に於ても人間の觀念を一つ一つの原子の如く考へて、其原子としての觀念の結合如何に據て種々なる精神状態が現れると考へた。例へば、知情意の三つの心の作用も實は此觀念結合の様式に據て出づるものであると云ふやうな考に到着したのである。然も其觀念の結合の法則は心理的聯想の法則に従ふものであるといふことに多くの學者が一致した。當時ヒュームの如きは此法則を恰も物理の引力の法則と同一のものであるとさへ云ふに至つた。其後、ハートレーに至つて是を聯想的原理と呼ぶに至つた。更にタツカー・ブリー・ストリー・ベルシヤム等の學者が其ハートレーの聯想學派の後を受けて、當時のスコットランド哲學派のリードや、スチュワルト等に反對した。ミルは矢張此ハートレーの學派に屬して、専ら聯想原理を用ひて心理的作用を説明せん

としたのである。

偕てミルの心理學の主要の考は總て心理的事實を客觀的に考察すると云ふ點にある。其意味は心理的事實は全く論理を超絶した事であつて、論理的の法則があつて然る後に心理的事實が存するのではない。例へば人間の心理的事實としての我々の精神は意志及び知識と云ふやうなものは寧ろ第二次的のもので、事實其儘として見れば感情の働である。其感情が如何にして現れたかと云へば、其源は矢張觀念に環元せなければならぬ。其觀念の結合に據て複雑な感情が現れて來るのである。而して其觀念は更に分解して見ると、外界の刺戟に據つて出づる感覺的印象に過ぎないのである。其故に彼の考では觀念と云ふものは印象の備忘録のやうなものであつて、其幾多の印象の結合が人間の心の作用となつて現れる。即ち普通云ふ處の感覺、觀念、感情、理性、意志の如きものが現れて來る。是は恰も物理現象の場合に於ける原子の作用

の如きものである。即ち心とは外界の印象に基く觀念の變化流動であると言にして云へる。其變化流動の法則は所謂聯想であつて、例へば我々が雷鳴を聽くや忽ちにして電光を聯想するが如きものである。而して此聯想は一種の因果關係として觀るべきものであつて、恰も物理の因果律に相當するものである。然るに是れを強ひて人間の神秘なる理性能力と觀た處のスコットランドのリード、獨逸のカント等は大なる誤に陥つて居ると云ふにある。例へば言語の如きものもミルの聯想説に據ると、明かに聯想的法則に據つて成立するものである。一つの單語と他の單語との間には元々必然的關係は無い。唯、事實的關係が聯想的に出づるのみである。即ち外界の一つの刺戟に對して、過去の既に成立してある觀念が其刺戟と結合する事に據て其處に初めて言語が生ずるのである。其又過去の觀念を溯つて探索して見れば、矢張外界の刺戟に據て出來たものに外ならないのである。例は「火が燃ゆる」

と云ふ事と「家が倒れる」と云ふ事とは元々何等の關係が無い。是を強ひて論理的の特別の關係と觀る事は出來ない。明に物理的原因結果を其儘我々の感覺的印象として取り入れる故に、一つの推理的言語として成立するのである。此點に於てはロック等に比較してミルは遙に唯物主義、感覺主義の考を  
 持て居つたと見るべきである。ロックは或觀念に限つて所謂内在的觀念として  
 先天性を持たせて考へて居つた。其點ではミルの方が遙に科學的思想家であつたと云はねばならぬ。

ゼームス、ミルに止らず、一般の聯想學派の學者は總て心理的事實を科學的事實に還元する事に一致した。即ち聯想原則直に感覺的の原則となし、其感覺的の原則を自然的の原則及び自然的秩序に還元する事を彼等の研究の目的の如く考へた。聯想的法則は大體二つの區別があつて一つは同時的の聯想今一つは繼起的、又は時間的聯想である。即ち同時的的感覺は同時的聯想を起し、

繼起的感覺は繼起的聯想を起す。而して其より生じたる觀念の強弱は何に據て生ずるかと云へば、聯想的感情の明暗、又聯想的度數の如何に據て現はるゝものであると云ふのがミルの大體の考である。更に彼の考とヒュームの考とを比較して見ると、ヒュームの聯想的の原理は大體三種類のものとした。第一は空時に於ける接近より生ずる原則。第二は因果から生ずる原則、第三は類似に基く法則、此三つである。然るにミルに於ては大體前の二者を多少變形した形式に於て認め、第三の類似は第一の接近の原則の一種と考へた。ミルは言語學に關する考も大體名目論的思想であつた。此考は前述のホルンツークの言語學上の名目論的思想を借用したのである。例は John is a man と云ふのは Man is another mark to that idea of which John is a mark. と云ふ事に他ならないのである。ジョンと云ふのは一つの名目であつて特に意味するものは無い。是と同様に判斷も一つの事物の名を他の名目で呼び換へ



る事に外ならぬ。例ば「二つと二つ」と云ふ事は「四つ」と云ふのと同じである。感覺的の事物は其儘存在し、是を表はす名目が變化して用ひらるゝに過ぎない。即ち世の中に存するものは「ジョン」だとか、「二つ」「四つ」と云ふものが存在するのでは無い。唯名目と離れた感覺的の事實が存するのみで此點から云へば昔の實在論者の云ふ觀念其物が實在すると云ふが如きは全く空想の事であるとミルは考へた。

更にミルは以上の心理學的の考察から、記憶、信仰、判断、等云ふ事柄も結局は一つの事實を幾様にも言ひ表はした事に他ならぬ。是を強ひて區別する事は困難である。記憶も信仰も其根本は一つである。又判断作用も人間の信仰の一つの表現と見る可きである。其間を繋ぐ處の原理は聯想的原理に據るのである。是等の考からミルは人間の觀念の種々なる相違は其に伴ふ處の實在は存在せない。唯二つ以上のもの、關をレ示す空虚なる名目として存するに過

ぎないと説明した。

以上はゼームス、ミルのペンサムの法律及び道德論と祖述する上に於て、其學術的基礎として用ひた心理學の説明である。此心理學的基礎の上に立つてペンサムと殆んど同一の政治、道德、法律に關する意見を述べたのである。今是より少しく彼の倫理説に就て多少彼の特色として居る點を述べて見よう。

前述の考からしてゼームス、ミルは人間の心理全體は一言にして云へば、總て或る外部の對象に向つて心が働く作用を云ふのであるとした。此考から人間の心理の根本作用は**欲望**と云ふ事で盡きると云ふ考であつた。其結果、彼は同一の對象を倫理、經濟、政治の上に用ひた。併し其對象を各々學問の性質に應じて名稱を異にした。即ち第一は倫理學に於ける功利、經濟學に於ける價值、

政治に於ける利己、此三大對象を以て三大學の一大組織を作つたのである。先づ彼の倫理説は其出發點を依然、聯想的心理學の上に出發せしめて居る。

此出發點から彼は先づ人間の生活を二方面から観た。一つは理知の生活、一つは活動の生活、其心理的の起源としては前者は觀念にあり、後者は感覺にあるとした。而して其觀念と感覺との兩者は前述した如くに聯想的に關係するものであるとした。

彼は人間の行爲の一般的動機たる欲望と云ふものに對して一種獨得の説明を下した。即ち欲望とは愉快なる感覺を伴ふ一つの觀念を指して云ふのである。

是に反して、嫌忌は苦痛の感覺を伴ふ觀念であると云ふ説明である。而して此の如き欲望が如何にして心理的に人の心の内に把持せらるゝに至つたかと云へば、此處に一つの外界の刺激が我々の愉快なる感情を伴ふ感覺として現れる時に、其が一つの記憶の形となつて我々の心の内に止まる。即ち此記憶的表象が欲望の觀念である。假に此の如き愉快なる感覺を伴ふ行爲が繰り返さるゝ時に、其觀念の印象が益々明瞭になり、其が爲めに其觀念が遂に一種の習慣性

を以て人間の行爲の動機となつて働いて来る。而して此處に内外の間に一つの循環的作用が現はれて来る即ち外部の刺激が内部の觀念となり、其觀念が又外部の刺激を求める原因と成ると云ふやうな風になつて、總ての行爲が繰り返されるやうになる。此作用が即ち風俗習慣、一般の道德としての對象を造るのである。尙、彼は此循環作用は筋肉運動との間にある平行的の現象を認めて愉快なる刺激に對する我々の全身の筋肉が或一種の收斂作用を營むと云ふ事を生理的に認めた。其點は彼の心理學は矢張今日の謂ふ生理心理學的の考であつた事が察せらるゝ。

以上彼の考からして當然現れる處の結論は一般倫理學に於て肯定する處の自由意志論を彼は全く否定した事である。彼は道德現象を飽く迄機械的に作成せらるゝ處の現象であると考へた。從來の哲學的倫理説や、又直覺的倫理説に極力反對をした。此彼の機械的道德説の特色を最も雄辯に語る一例を此處に

舉げて見よう。

其一例は當時の哲學者として有名なりしマツキントツシユの論文に對するゼームス、ミルの反駁である。マツキントツシユ(I)は百科全書中に倫理哲學に關する一論文を書いて、當時の功利主義者の倫理及び哲學說に對する非難をした。是を見た處のゼームス、ミルは大に憤慨して、遂に「マツキントツシユに對する一斷片」を世に公にするに至つたのである。

マツキントツシユの考は大體、彼の哲學の系統であるスコットランドの直覺派に屬するものであつた。從て道德的の直覺を重んじて其處に彼の議論を立てた。即ち人間の道德と云ふものは決して功利的又打算的に働くものでは無くして、其處に一種の道德的審美作用が働くものである。例へば一人の英雄が國家の爲めに行動した時に我々は其に對して美的感情を以て之を賞讃するのである。決して之を國家の利福から打算して其の行爲を賞讃するのではない。

感言、  
後悔

即ち此美的作用は良心作用であつて決して利害得失の觀念から出づるものではない。其他、他人に慈善を施すのも決して其慈善が如何なる利益を人に與へるかと云ふ計算から怡ぶのでは無い。唯、直覺的に一つの良心の賞讃として怡ぶのである。以上がマツキントツシユの功利主義に對する非難の大體と並びに彼の主張の大要である。

ミルは以上のマツキントツシユの採用した處の道德感官說に對して先づ非難の矢を放つた。ミルは道德感官と云ふが如き特別の感官が我々の身心に備つて居る譯はない。斯る感官の如きものがありとしても、其は他の潜在した理由に據つて怡も直覺的の形を以て現はるゝに過ぎない。其潜在的の理由は結局社會的功利と云ふ事に他ならぬ。其故に功利は道德の標準であつて、人間の總ての行爲の善惡は社會的の功利を結果として持ち來らすか否かに據つて定まるのである。其他に道德的判斷の根據となるものは無いと言つてマツキント

ツシユの直覺説を攻撃した。

ミルは又ベンサムと等しく道德と法律の一致を主張した。吾人の自他に對す道德的判斷と云ふものは大體二つの種類がある。即ち一つは社會全般として現はるゝもの、今一つは個人的に現はれるものとの二つである。此兩者は共に人間の行爲の結果に對する判斷であつて、普通、前者は法律的の判斷と稱せられ、其判斷を有効ならしむる爲めに法律的の制裁と云ふものが是に伴ふ。今一つの判斷は一般に道德的判斷と稱せらるゝものであつて、所謂、良心の賞讃と苛責是である。此良心の判斷と云ふものも結果に對する判斷であつて、決して動機に對するものではない。

ミルにとつて彼の倫理説としては飽く迄も功利主義に據つて行爲の結果に重きを置いた。行爲の結果を判斷の對象とする故に吾々の實際行爲の上に於ては其結果を造る手段と云ふものが非常に大切な役目を働くものであると云ふ考で

ある。行爲の動機に就ては、彼はベンサムと同様に道德的判斷、法律的判斷の標準とす可きもので無いと云ふ考であつた。何となれば動機は要するに萬人一樣のものであつて、即ち快苦の原理に従ふものである。換言すれば如何なる人と雖も、快を求め、苦を避けると云ふ事は人間本然の性であるからである。従て行の善惡と云ふ事は手段と其に據つて持ち來す結果に據つて現はれるのである。ミルは他人に對する慈善の感情の如きものに對しては下の如く言つて居る。是等は決して直覺的のものでは無くして、矢張功利的聯想から現れたるものである。其が證據には同情の働は最も自己の直接なものに對して顯著に現れる。例ば自身の親子、兄弟、朋友、次第に遠ざかつて社會全般に及んで行く。是等は要するに功利的の聯想に起原するものであると云ふ事を證據だてたものである。

最後に聊か彼の當時の學界に於ける位置を些少述べて置きたい。

ゼームス、ミルは思想的にもまた功利派の上から見ても、ベンサムベンサムの學說を祖述すると云ふ事に大體重きを置き、従つてベンサムベンサムの學說を一步踏み出すと云ふ事に就いては餘り多く考慮せなかつた人である。其故に彼の學界に於ける功績と云ふものは、第一にベンサムベンサムの學說を最も忠實に後世に傳へたと云ふ事と、第二にはベンサムベンサムの政治法律論を基礎づける爲めに心理學等の方面から綿密なる研究を加へたと云ふ事、第三にはベンサムベンサムに比較して遙かに豊富なる歴史的知识を以て功利主義の成立を助けたと云ふ事、言ひ換へれば功利主義を實際歴史上から立證したと云ふ事、以上の三點が彼の學界に於ける功績であつた。彼の哲學的思想が如何なる系統を引いたかと云ふ事は既に前述した如く大體、ベンサムベンサムに師事し法律政治思想を其儘酌んだが溯つては哲學的にヒュームの思想に影響せられ、心理的にはハートレーハートレーから影響せられて出來たものである。其ゼームス、ミルミルの思想の後世に廣く傳へたのは、又主としてアレキ

サンダー、ペイン及び彼の子息のジョン、スチュアート、ミルミルに據つてである。斯くて心理學としては聯想主義、政治道德的には功利主義として益々此學派が世の中に盛大に流行するに至つた。

(1) Sir J. Mackintosh (一七六五—一八三二) はスコットランド派の哲學者で、當時、佛國革命に同情した人として有名であつた。其著として有名なのは *Dissertation on the progress of ethical philosophy*, (1830) である。

## 第九章　ゼームス、ミルの政治論及び法律論

ゼームス、ミルの政治論を研究するには、彼の英國百科全書中の政治論ガヴァーニメントを參酌する事が最も捷徑である。其故に、今は其政治論に據て其思想の大體を述べて見ようと思ふ。

抑々、彼の政治的目的とした處は最大多數人の最大幸福であつて、其幸福は、結局經濟的因果律に據つて生ずるものであると考へたのである。是を詳言すれば、自然界が我々に與へた處の物資の供給、又其を基礎として生ずる處の勞働の生産力、此二つのものが適當に調和して初めて最大多數の最大幸福と云ふ功利主義の原理が充足せられて行くのである。併し、此處に今一つの問題は勞働の生産力が其生産力を刺激して行く處の欲求と一致せない場合は、其處に初めて人類間の所謂生存闘争と云ふ現象が現れてる。此生存闘争は從來

の人類生活の歴史の上から觀ると、殆ど必然的の現象の如く見ゆる。從て其闘争より生ずる人類間の災厄を適當に抑制してゆく機關を所謂政治と稱するのである。換言すれば政治は社會の個人間の欲求を妥當に調和してゆく事が其目的である。

偕、最大多數の最大幸福を社會的に規定する爲めには、其處に必ず一つの政治組織が必要である。其政治組織の中心とするものは勢ひ小數の有識者である。此小數の有識者は一つの政府を造つて、其政府の權力に據つて二つの職務を果してゆくのである。其職務の一つとは個人の財産を保護する事、今一つは其個人の勞働から生ずる最高生産額を増進せしむる事である。

以上の政治の目的を果す爲めには、如何なる政體が必要であるかと云ふ事は、從來からの實際問題である。古來行れた政體は、第一は總ての政權を社會一般民衆の上に置く形式、第二は小數の人々に其政權を一任する形式、第三には

一人者に其政權を一任する形式、此三つである。換言すれば、第一は民主政體であり、第二は貴族政體であり、第三は王權政治である。第一の民主政治は最理想的であるけれども、其は極めて少數人の社會に於てのみ實行し得るもので、現代の如き大社會には實行の困難な政體である。残の二つの政體は是又實際上に於ては大に疑問とす可き政體である。元來、政體の目的とする處は個人の利己的行爲を制限し、又其利己的欲求を整頓（I）する事にある。然るに若し貴族政治を許すとすれば其貴族の少數者が己の私欲を逞しふする恐れがある。又王權政治に於ても殆ど是と同一の事が云はるゝ。併し歴史上より觀ると、貴族政治は王權政治よりも惡政を残した場合が多い。其點に就ては、ホッブスの如きも、寧ろ政權は國王に一任する事が最も適當な方法であることへ云つて居る。併し、是とても到底完全なる政體と云ふ事は出來ない。東洋諸國に於ても國王が政權を専らにしたが爲めに反つて其結果が政治上の惡弊

を醸した例は尠からずある。如斯、以上の三政體が不可であるとするれば第一の民主政體に最も多い近い代議政體を採用する事が現代に於ては最も適切である。

ミルは以上の論據からして、代議政體の組織に關して詳細論述する處があつた。即ち、被選舉人の資格として或一定の年限を定めること、又選舉區の利益は絶えず國家全體の利益と一致せしむる方法を運らすこと、又投票權は之を所有する人の個人的利益と一致する場合は二重に投票權を與へぬと、例へば父の投票の内には其妻、子供の權利が包有せられて居るから、二重に與へぬと、其他選舉人の資格等に就ても例へば選舉人の年齢、財産、職業、生活狀態等に關して詳細論述した。又以上の政治組織、即議會政治と王權との矛盾や、其他、代議政治が果して眞の民衆政治となり得るや否や、換言すれば代議政治が民衆一般の共通の利害を能く代表し得るやの世評に對しても、彼は飽く處なく、詳

に反駁した。

以上はミルの政治論であるが、彼の法律論に關しては大體ベンサム  
の法律思想を祖述したものであつた。彼の法律と云ふ概念は「權利の保護」の意に外な  
らなかつた。是の權利保護の考から、種々なる特種法律が現はれた。刑法  
は特にベンサムの研究にて既に完成せられて居つたので、ミルの努力した處は  
民法及手續法に關した部分であつた。其結果、ミルに至つて當時の歐洲諸國  
の法典の基礎たる如上の刑法、民法、手續法の三者が學問的に確立したのであ  
つた。彼は法律を指して分與せられた權利を保護する代人であり、又同  
時に禁止せられた法を犯した場合は之を罰する代人であると云ふ考を以てし  
た。然もこの法律の定義的考察は依然彼の功利主義の原理から來たものであ  
つた。

彼は又功利主義の立場から國際法の考を抱持して居つた。併し、彼の法律運

用の上から法律的權威と之に伴ふ制裁に關する考は之の場合に充分ではなかつた。只だ道德的立場から考へて世界的に人類の輿論として成立し得るものと云ふ考であつた。

猶ほ彼はベンサム以來の監獄制度の研究を進め、囚人の衛生、罰則の方法、囚人授産の方法等に就て論究し、又拘留と處刑との區別を刑法上の實際問題として大に論述した。

終りに彼の教育論に就て少しく述べよう。ミルは教育の原理を依然功利主義の上から論じて居る。従つて之の考は稍や近代のスベンサア等に近いものであらうが、一般の教育學歴史の上からは非常珍らしい考である。彼は教育の目的に就て次の如く云つて居る。

教育の目的は要するに個人を出來る丈先づ彼自身のためと、又次で他の人々のために幸福を齎らしむべき用インスツルメント具となすにある、と云つて居る。而して



此の立場から教育心理的方法を論じた。

彼の教育的方法論は先づ第一に人生の目的に適順し得る手段としての知識を興ふると、第二には人生の有害なる慾性を抑制し、整頓する攝生を教ふると、但し此場合に克己其自を目的とするとの弊害を救ふこと、第三社會の人々の幸福のため自己の恩惠的本能を發揮すると、其本能には二種ある。一つは正義であり、他は寛怒である。之を以て宜しく人類教育の方針とすべきであると論じた。

(I) 利己心を整頓すると云ふミルの考はホッパスと大體同一であつて、メンサムの民主精神とは大に趣を異にする。

## 第十章 マルサス及其時代

トーマス、ロバート、マルサス(一七六六——一八三四)は當時に於て功利主義の運動に携つた一人であつた。併し彼の思想は殊に前述の如きペンサムや、ハアトレイや、ミルの如き人の哲學的思想の系統の人でなかつた。反て、當時の科學的思想家の一人であつた。唯だ其科學的思考の上に立つて、廣義の功利主義的又啓蒙的運動に携つた。彼は當時相前にした佛のルッソーや、コンドルセーや、英のゴドウインの思想とも稍や近い處はあつたが、然も彼等よりは遙か實際的であり、又科學の上に立つた社會改造論者であつた。強ひて其思想の起源を求むれば、タツカアや、バレーの一種の哲學思想の基調に立つて居つたものと思はるのである。併しマルサスの得意とした處は以上の思想家の如く、空想的でなく、又抽象的でなく、飽くまでも科學的、實際的であつ

た點に注目すべきである。斯る思想の持主であつた結果として、千七百九十八年には彼の世界的の著述「人口論」(An Essay on the principle of population)が公刊せらるゝに至つた。彼の云ふ處は彼のオウエン一派の社會主義者の主張するが如き、社會的平等主義は決して實際上實現し得べきものではない。何んとなれば、世界人口増殖率は恒に生計資料の増殖率以上に増進する結果、其處に必ず不平等の原因としての競争が現はれると云ふにあつた。是の考は一面非常に科學的であると同時に、他面に於ては當時の空想的社會主義を打破するに足る有力なる功利主義的思想であつた。マルサスの人口論が第二十世紀の現代に於ても、尙ほ有力なる社會的思想たる所以は、主として是の功利的基調に根據するものと云はねばならぬ。Malthusian Theory of Population

マルサスは一千七百六十六年英土のサアリ郡に生れた。彼の父は學者肌の人であつた。父の思想は當時のルッソーや、ゴトウンの社會主義的理想主義に屬す

る人であつたが、其子息のマルサスは寧ろ實際的研究家の型の人であつた。其點に於ては、彼の兄もルッソーの影響を強く持つた人であつたので、彼とは全く性情が違つた人物であつた如くである。マルサスは初めケンブリッジ大學のジイザス、カレッヂに學んだが、其處では彼のギルバート、ウエクフキルドから思想上の影響を享け、千七百九十三年にはフューローになり、卒業後千七百九十八年にはアルブリの牧師補となつた。當時、英國に於てはゴドウキンの社會革命思想が流行し、千七百九十三年にはゴドウキンの「Political Justice」が發刊せられた。マルサスは父と常々此の二書に就て討論したが、其思想の結晶として現はれたものが、彼の「人口論」であつた。何んとなれば彼の科學的歸納論は此のゴドウキンの抽象的社會主義を飽き足らず、益々人類生活の事實に立脚する一種の世界觀を造るに努力せしめたからであつた。其故にゴドウキンや、ルッソーは彼に採つ

て猶ほ空想的論客であつて、人類生活の實際的功利的方面を閑却したものと考へられたのであつた。

マルサスの研究した人口の増殖と自然の生産力の増進との關係に就ては、當時既に政治問題として世の注意を惹きつゝあつた。内には之を動機として社會革命を唱道せんとするものがあり、之が資本主義に對する近代の革命運動の第一歩の觀があつた。彼のゴドウキンの如きも非科學的思想の上からではあるが、之等の點から理想的社會を空想して居つた如く見ゆる。従つて、此の人口論に就いて一應國內の實地調査が必要であると云ふことになり、千七百五十二年にはジョン、ポッターと云ふ宗教家の一子息が遂に議會に右の人口調査の請願をした。この請願書は幸ひ下院は通過したが上院に於て否決せられた。併し、之の實地調査に關する英國人一般の期待は久しく後ちまでも繼續せられた。

人口調査に關しての當時の英國人一般の實際的興味は、彼の倫理學者のリチャード、プライス（一七二三—一七九一）の統計的調査によつて代表せられた。彼の概算によると、英國の人口は彼の一千六百八十八年の革命の後殆ど四分の一の減少を見るに至つたと云ふに在つた。而して以上の研究を基として、當時のピットは貧兒保護法を稱賛した。併し是のプライスの説に對してはマルサスは全く反對の立場に立つた。即ちピットの貧民保護法は一見道德的の如くであるが爲め、却つて人口の急激な増加を來し、其増加率が自然の生産力の増殖率と相平行しない状態が到來し、其結果の國家的大問題を惹起するを懼れたからであつた。是の事あつて以來、マルサスは實際的調査の急を感じて多忙の時を割いて、大陸諸國に旅立つに至つた。當時、彼の足跡の印した國はスエデン、ノルウェ、露西亞、獨逸、佛蘭西、瑞西、等に及んだ。最初千七百九十九年に第一回旅行を了へ、更に千八百二年に第二回の旅行を了へた。

彼の著「人口論」は千七百九十八年に第一版を上梓し、千八百三年に第二版を重ねるに及んで、旅行より得たる調査資料の増加のため第一版の約四倍の頁数を増大するに至つた。第三版は千八百六年に第四版は其翌年に、第五版は千八百十七年、第六版は千八百二十六年に續々重版せられ、従つて當時此の「人口論」は世界に膾炙せられ、千八百六年には獨逸語に翻譯せられ、次で千八百九年には佛蘭西語に翻譯せられるに至つた。以て當時彼の「人口論」が其聲名を世界に博したことが儉はるゝのである。

マルサスの功利主義的思想は彼の「人口論」の序文の内に最も能く表はされて居る。

人口は凡そ其生活の便宜以上には増加するものではない事は一般の學者の從來共通に考へた處であつたが、偕て其の理由如何、又如何なる過程で斯かる結果に到來するかと云ふことに就ては未だ充分に研究する者がなかつた。

云々余は斯る興味ある問題を研究するに當つては、眞理を愛する一念に馳られて、是の目的を成就せんことを念ふ。云々。

又曰く。

本書中に叙述した人生に對する余の考は甚だ悲觀的であるが。是は人生の實際であるから致し方がない。決し余偏見の致す處ではない。云々。

と云つて居る。是等の序文を見ると、マルサスの學者としての心情や、又其人爲も推測せらるゝのであつて、如何に利用厚生の念に篤きかと判るのである。千八百五年には終に彼の學問的成績が承認せられて、ハイリブリ大學のイーストインデアン、カレッツヂの歴史及び經濟の教授となつた。

彼は當時の功利主義者と多く交り、又フイグ黨の人々とも親交があつたが、殊に例の經濟學俱樂部が出来して以來、リカルドを始め、當時の多くの政治家、思想家と交際した。當時の思想家及政治家の間には凡そ二の流があつて、一つは

政治家としてのフイグ黨、思想家としての功利主義者が彼の資本主義的傾向と自由貿易のマンチエスタ流を代表し、今一つはゴドウキン一派の社會主義派であつたマルサスは大體に於て其中間を行く人であつたが、其孰れにより多くの好情を以て臨んだと云はゞ、勿論功利主義に對してであつた。

## 第十一章 マルサスの人口論と道德的見解

マルサスの人口論は其研究の動機をゴドウキンの社會主義的思想に對する批判に出で、居るとは、彼の「人口論」の序文に於て既に見らるゝ如くである。ゴドウキンの思想は彼も云つた如く、極めて活氣に充ちた、然も道德的精神に一貫せられた點は稱讚するに價がある。併し其論述する處を靜に考察すると、ゴドウキンの社會主義的思索は徒らに獨斷的であり、又抽象的で、歸納的根據が薄弱である。之の點が却てマルサスの研究心を刺戟した大なる理由となつたのである。

抑もゴドウキンの考は現代の社會制度の缺陷を以て遂に人類社會の惡徳と災害とを併せ起因する處であつて、殊に現代の財産制度が人類生活の幸福を根本より破壊する有力なるものであると云ふ考であつた。其故にゴドウキンは下の

如く云つた。

人間の壓制や、卑屈や、詐欺の如き惡徳は皆現代の財産制度から生ずる直接の結果で、皆人間の理性の敵である。嫉妬や、怨恨や、復讐の如きものも亦以上の惡徳に隨伴して現はるゝものである。若し、物質が豊富であり、萬人平等の自然の恩恵に恵まるゝならば凡そ人類は以上の惡徳を芟除するに至るであらう。云々。

又曰く。

個人は利害を念頭に置かず、總の狹隘なる利己心は其力を失ひ、争鬪は其目的物を喪ふに至り、何人も其隣人を愛し、結果、全社會は博愛の精神を以て満さるゝに至らるであらう。云々。

以上のゴドウキンの叙述はマルサスに採つては依然一つの空論に過ぎない、感があつた。マルサスの考は一言にして云へば、人口の繁殖率は幾何級數な

るに反して、自然の生産率は僅に算數學的である。其結果、瞬く間に人口の増加は自然生産の増加を超過し、其が爲めに世界の人類は其生活を自然に順應する能はざるに至るであらうと云ふて在つた。是を彼は下の如くつた。

吾人の見る處を以てすると、人口の増殖は食物の生産力と相一致せず。

然も人類は其生活を如何なる方法に於てか一致せしむる必要あり、其一點は全然兩者の相反馳する處より悲觀せざるを得ぬ。是點より他の事物を考察せば殆んど他の事物は單なる枝葉の問題に過ぎない觀がある。云々。

と云つた處を見ると、彼の考察した要點は極めて明瞭であつた。マルサスは此の見地に立つて、彼のピットの貧民救済法案を非難した。彼の見を以てすると、ピットの貧民救済案は動機と目的の善良なるに至つては誰しも反對するものはない。併し救済案其者は大なる誤謬を包含して居る。蓋し、該法案は以下の二點に於て結局社會に弊害を却て醸生するものである。其の第一は

救済案の施行の曉は貧民が自己の収入を豫め計算するとなく、妄に結婚すると。其が爲めに多産を促進するとなり、社會一般に影響して、遂には徒らに物價騰貴の傾向を促進するものであると云ふを。第二には此の救済案は他の一般勤勉なる市民に對する經濟的壓迫を將來することであることを論じた。當時の人々が之の貧民救済法の有害無益なる點を非難したけれども、其等は多く恰も官吏の私腹を肥すことにあるが如しと論じたのを、マルサスは専ら以上の立論から貧民の増加と之に伴ふ食料の遞減を齎す所以を評論した。マルサスは以上の人口論からして、之を自然の運命に歸し、之の運命を如何にして脱却せしむべきかを詳論し、其第三章に「道義的制限及吾人が此の道義の實行を要する所以」と云ふ點を述べて居る。彼の説を以てすると此の自然的運命を脱るゝ爲めには、如何なる方法に於てか人口を制限せなければならぬ。例へば、産業を保護獎勵し又移民をも獎勵した曉は、必ず外少の效果がある。然らざれば

早晚人力を以ては如何ともすべからざる一大厄難に遭遇するであらう。其故に之の人口制限の方法は出来る丈け、不徳ならざる範圍にて爲すべきである。而して之のマルサスの結論は如何に彼の思想が功利主義的であつたかを想見せしむるに餘りあるのである。

マルサスの人口制限の方法は飽くまで功利主義的思想から打算せられ、又其が最も人類一般に對する德義的方法であると考へた。即ち彼の考では世人は總て恒に己の家族を扶養し得べき豫見を以て子女の數を豫め定むべきである。又世人が歳若くして結婚する場合に在つても、子女の生まるゝ際に之に應じて養育するに餘りある収入を豫め考量して、然る後ちに結婚すべきである。若し此の義務を怠る時は忽ちに早婚より來る弊を生じ、延ひては貧窮、疾病、飢餓等の災厄に遭遇するであらうと。

マルサスは更に所論を進めて、世の道學者中には以上の論述に對して或は反駁

するものもあらむ。即ち斯る自然的運命の如きは是れ一種の空想であつて、所謂造物主が人を生む限り、必ず人類を自然的に養育するに相違がない。之を信せざるものは神を侮蔑するものであると駁論するであらう。併し之の駁論は蓋し大なる誤謬であつて、天は決して人類のみに幸するものではない。又翻つて、従來の倫理説より考察するも、道德的の克己と云ふことは非常に大切な事であつて、節制の徳は以上の人口の制限の上に應用し得べき徳である。之の克己節制は有ゆる徳を其内ちに包含し、之の克己の充實した社會こそ、眞の平和の社會である。克己の徳は種々なる社會的方面に表はすことが必要である。即ち、節儉貯蓄の氣風を世人に養はしむることは、勞銀の極端なる低落を防ぎ、労働者をして路頭に迷はしむるが如きことがなくなるに相違ないと論じて居る。此邊の思想は嘗て牧師の職に在つたと云はるゝ彼の面目が躍如として現はれて居る。

#### マルサスの著述の主要なもの

- An essay on the principle of population as it affects the future improvement of society, with remarks on the speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet, and other writers 1798.
- An essay on the principle of population; or a view of its past and present effects on human happiness. 2nd ed. 1803
- Observations on the effects of the Corn Laws. 1814.
- An inquiry into the nature and progress of rent. 1815.
- Principles of political economy. 1820. 2nd ed.(with life of the author by BP. [Otter], 1836.

#### マルサス研究の参考書

- Op. J. Bonar, Malthus and his works, 1885.
- Letters of Ricards to Malthus, 1887.
- L. Cossa, Il Principio di popolazione di T. R. Malthus, 1895.
- A. Soetbeer, Stellung der Sozialition zur Malthusschen Bevölkerungalehre, 1886.



## 第十二章 ジョン、スチュアルト、ミルの生涯

ジョン、スチュアルト、ミル（一八〇六一一八七三）の父ゼームスは彼の三十歳の時に逝去し、ベンサムは廿六歳の折に死んだ。併し、彼は大體に於て父ゼームスや、又其父の先師たるベンサムの思想を最も適切に理解し、是を繼承した人であつた。彼の父ゼームスも子息ジョンの學才を愛して、嘗てベンサムに己の後を繼ぐものはジョンであると書き送つたことがあると云はれて居る。

ジョン、ミルの自叙傳によると彼は幼少の時代から記憶力に秀で、三歳の時には既に希臘語を習得し初め、八歳にしてヘロドタスや、ゼノホンや、又プラトーなどを讀んだと云はれて居る。九歳より十一歳の間にはホーマーや、ツキヂデスや、ソホクレス等を讀破し、十一歳にはアリストートルの修辭學を修め、

十二歳にはヴァジルや、ホレーヌや、シセロ等を讀んだとあり、又八歳頃には既に數學を學び初め、次第に立體幾何學や、三角術に至るまで進んで行つた。父ゼームスは子息ジョンの數學上の疑問には大に弱らされたと云ふことである。次で彼は益々早熟的に科學的書物を愛讀し、又英國史を好んで熟讀し、ホルンセー附近を父に伴つて散歩する時には恒に史論を闘はした。又漸やく成長するに及んで哲學者ヒームを讀み、ギボンや、ワットソンの「ヒリツブ二世及三世の和蘭革命」等を愛讀したと云はれて居る。父も又彼をして努めて偉人傳を讀ましめ、彼の向上心を刺戟した。又彼は他方に於て空想の世界を逍遙することを好み、ロビンソン、クルソーや、アライビヤンナイトとかドンキホーテ等を讀み、詩文の方面に於てはスコットや、キャンベルや、セキスピアを耽讀した。又閑ある毎に歴史的論文を書いて樂んだと云はれる。

彼が哲學に親んだのは彼の十二歳の頃からで、翌十三歳には既にアリストツル

や、ホップスの哲學を読み、プラトリーからは論理的智識を與へられたと云つて居る。併し、プラトリーからは詩的思想に影響せらるゝことは少なかつた如くである。

父ゼームスと子息ジョンとの思想上の關係は極めて緊密で、其處に何等の矛盾もなく能く連絡があつたと云ふことは父の教育的感化が深く子息の上に及んだ爲めとも考へらるゝ。父ゼームスが子息ジョンを教育する爲めに、絶えず父の讀書室に子息を伴つた。此の一室に於ては父は時として「嚴格過ぐる」程の教師であつたことを其自叙傳の内ちに想起して居る。亦父は彼の幼年時代は成るべく彼をして學校友達と遊ばさしめなかつた。其は父としては彼に不行儀を習はしめない用意であつたが、彼に採つては是の時間を讀書の時間として利用することが出来た。併し、其等の習慣が性癖となつて彼は其後に於ても常に學者的の氣風を失はなかつた。

ミルが十四歳の時にはゼルミー、ペンサムペンサムの弟のサア、サムエルと共に佛蘭西の西部に留つて、其處で佛語の練習をし、傍ら數學及經濟學等を學び、亦植物學をも修めた。彼の後年の思想は大に是の佛蘭西留學中の自由なる學生々活から影響せられて居る。彼が後年第十八世紀の佛蘭西哲學を中心として研究したのも此の少年時代の佛蘭西留學の感化であつた。彼が後ち佛國の當時の新進哲學者としてのコントコントと親交あり、又一面、彼の功利主義がコントの實證主義と共鳴する處の大であつたことも、思ひ合せば大なる理由のあつた處である。其と同時に彼の功利主義的思想の内ちに、殆んど獨乙哲學の片影だにもなかつた事も以上の事情と對照して易く理解し得べき處である。千八百廿一年にミルは英國に歸つた。其後は法官の職を補佐し、其間に多くの書籍を涉獵した。其主なるものは左の如き當時の有名なる哲學者の著述であつた。即ちロック、エルベチユズ、ハートレー、ボルクレー、リード、ステユワルト、ブラウン等

の著作を耽讀したのであつた。併し是によつてミルの思想は全く圓熟の境に入つたのである。

ミルの比較的年少時代の交友としては、彼のジョン、オースチンとジョルヂ、グロートとを見逃すことが出来ぬ。兩者共にミルには多大の感化を與へた人々であつた。ジョン、オースチンは彼の家庭教師として又ジョルヂ、グロートはミルの年長の友として影響する處が大であつた。又オースチンの弟のチャールズ、オースチンもミルとは親交があつた。

ミルの操觚の第一着手は千八百廿二年のトラベラ誌上に、リカルドと父ジョン、ミルの辯護論を掲載したに始まる。其後モーニング、クロニクルやウエストミンスター誌上に徐々執筆した。其以來次第に世人に知らるゝに至つた。廿歳の折りにベンサムの“Rationale of Evidence”を編纂したとは若年にしはて大なる成功であつて當時の學界の人々をして其手腕に驚歎せしめた。此事業の爲に彼

は多少疲勞を感じ、千八百卅九年遂に神経衰弱症に陥つた。彼が後來之がために惱まされ千八百卅九年には保養のために伊太利に旅行した。次で亦もや呼吸器病と胃病のために惱まされ、千八百五十四年に再び伊太利、シシリ、希臘等に烟霞療養を試みた。併し其が爲めに彼の智腦の衰ふ處はなかつた。ミルの學究心の最高潮に達した時期は凡そ千八百二十年前後からであつた如く見ゆる。彼がグロートと親交を有し、グロートの家で當時午前八時半より十時頃まで、經濟學、心理學、論理學に關する研究をつゞけ、一日も研鑽を怠らなかつたと云はれて居る。當時の研究資料となつたものは父のゼームス、ミルのものや又リカルドの資料であつた。千八百廿五年には彼の社會主義者のオウエンの徒が一週一度の討論會を開催したので、是の討論會にはミルは又功利主義學派を代表して加つた。時としては三ヶ月に亘る大議論を闘はした事さへあつた。然も其議論は終結を見ずして了つた事があつたと云はれて居る。

當時、ミルは未だ廿歳前後の最も新進氣鋭の時期であつたので、今回缺かさず是の討論會に臨んだ。當時ミルと議論を闘はした人々は功利主義者の外にマコレイ、サアルウオルブレードの如き、又革新派の人々としてはチャレース、バアラーや、コックバーンの如き、其外自由派の人にあつてはモウリスや、ステリングの如き、錚々たる人々があつた。當時、是の會合を指してスペクエラチーフ、ソサエチーと云つた。然るに千八百廿九年にはミルは之を辭して専心自學の方法を講ずるに至つた。其動機は主として當時マコレイが父ゼームス、ミルの學問を非難したに基き、然も其の云ふ處が少なからず肯繁に當つた處があつたから、之の父の學說を功利主義上より補充せんと志したからであつたと云はれて居る。ミルは此の時代から少なからず、佛のサン、シモン學派の影響を受くに至つた。千八百卅年及其翌年にかけて彼は「經濟學上の未定の問題」に就て脱稿した。

ミルの研究熱は更に進涉し遂にベンサム以來の功利主義の改造に志さしめたのであつた。彼は當時のオウエン派の社會主義的思想は云ふ迄もなく、其他佛國の自由主義や、サンシモン派の思想と接觸するに及んで、從來の功利主義が餘りに一面的であることに心付き、以上の時代思想をも參酌して、之に依つて功利主義の抱容力を大ならしめようとした。亦彼は當時獨逸語も少しく研究し初め、獨逸思想に赴かんとした。彼がコントに書面を送つた内中には、當時論理學を獨逸思想を利用して書いて居ると云つた。併し此の事あつて以來獨逸語に對する彼の興味は長くは續かなかつたと見え、畢世獨逸思想の影響と見るべきものが少なかつた。唯だ獨逸思想に就ては英佛語を通じてのみ知つた。カントに關するものもヘーゲルに對するものも皆等しく英佛譯によつて知つたのである。

當時、ミルと前後して功利主義の上から政治論を闘はした名士は少なからずあ

つた。例ばバアラ（一八〇六—一八四八）の如き、一面に於てカアライル派の論客にして、猶ほ功利主義の謳歌者であつた人の如き、又、サア、ウイリアム、モールスウオス（一八一〇—一八五五）の如き人もあり、其外には彼のグロートの如き人もあつた。而して、是等の名士論客に依つて廣く功利主義は天下に宣傳せられたのであつた。併し、ミルは是等の人々の間にあつても功利主義の學問的宣傳には最も有力な人であつた。彼は孰れかと云はゞ學者肌で、加之、文筆に長じた人であつた爲め、常に操觚者として自由評論家として頭角を現はした。彼が自由評論家として新聞雜誌に掲載したものを集録すれば、彼が告白した如く當時既に「優に一卷を成す」に足る程の論文が在つた。當時ミルが主として執筆したものはモールスウオスの發刊したロンドン、レヴエであつて、該誌は千八百卅五年の四月に初號を出したが、後モールス、ウオスがウエストミンスター誌を買収するに及で、ロンドン、アンド、ウエストミンス

ター誌の名によつて續刊した。此の雜誌上にはミルの論文は多收に掲載された。該誌は其後に至つてミルの手に買収せられたが、ミルは却て其がために大なる損失を蒙つたと云はれて居る。ミルが當時物した論文は後ち彼著述「論文オキシフォード、デスカシオンズと論説」の内に収録せられた。其論文は孰れも一時的問題に就てでいなく、功利主義の根本問題に觸れての功利主義の第一原理を論じたものが多數であつた。従つて、其論文は彼のペンサムペンサムの思想の欠陥を補ふ點に於て大に努力したものと云ふべきである。

當時英國政事界に於ては、一般選舉權擴張に關する爭論が中産階級と下層階級との間に行はれた。下層階級の主張するチャーチズムの主旨は（一）毎年議會を開催すること、（二）一般投票權、（三）被選舉權に關する財産上の制限撤廢の三點であつた。ミルは此の政治問題に對して依然功利主義の立場から、此の兩者の妥協を計らんとした。彼の考へた處に據れば若し下層階級が自己の意

見を納るゝならば彼等の利益たると同時、中産階級の主張とも調和し得とすの自信に基いて彼は努力した。併し其結果は其努力に報ひる處はなかつた。

ミルの當時の政治問題と關聯した彼の考い大體の下の如くであつた。

彼の考ふらく中産階級は下層階級に比して政治的に重要視すべきである。何んとなれば當時の下層階級はまだ教育普及せず、従つて個人的には到底中産階級の人々と其人格價に於て比肩すべくもない。若し是等の下層階級の人々をして政治的實權を握らしむれば、自から社會の健全性が喪はれねばならぬ。故に今日に於ては下層階級に政治權を與ふるに先て之を教育することが急務である。以上の考は要するに功利主義的個人主義の立場であつて、當時に在つては最も妥當の處見であつたのである。然るに當時の一般労働階級は徐々ウエン一派の社會主義に傾いて、次第に過激の傾向に奔つたのはミルと採つて遺憾の極であつた。

ミルが個人主義の上に立つて總ての事物を考慮して居つたのは、彼が當時の詩人や文學者の天才を愛し、人一倍之を稱譽したことに於ても其邊の消息が知らるるのである。例ば彼が千八百卅五年の倫敦レビュー誌上にテニスンや、カアライルの天才を稱譽した。殊にカアライルはミトルは餘程性質並に思想の違つた人であつたに關はらず、彼がカアライルを譽めたい大に注意すべきである。カアライルが千八百卅一年、倫敦に來て以來ミルとは深い交をしたが、就中、カアライルのクレゲンブツクに隱退して以來、益々兩人の交際が親しくなつた。カアライルは思想家としては一方面的の處があつたが、又ミルにも彼一流の一方面的の點があつた。然も不可思議に兩人の思想の交渉は久しく繼續せられ、其結果、兩者相互に大に影響する處があつた。ミルの方からはカアライルの佛國革命史に對する多大の資料を提供して居るが、又カアライルの方からミルに對して種々なる點に於て詩的又神秘的感化を與へたことは明なる事實

である。其結果、ミルの思想も彼のベンサム式の乾燥なる傾向から次第に遠ざかつて、後年益々詩的趣味を加ふるに至つた。併し兩人の思想は元より其根本に於て必しも調和したのではなかつた爲に、後年或事件のために兩人の間が終に阻隔し初めた。是と同時に次第に思想上の隔絶も現はれて來た。ミルより云はゞカアライルは一種の天才肌、詩人肌の思想家であつて、其思想は到底社會の實生活に交渉を持つ事が出来ぬと考へ又カアライルはミルは徒らに實際的思想に囚はれ、宗教等に對して深い理解がなく、其科學的態度も到つて不明瞭な概念上に立つて居ると云ふ非難を持して居つた如くである。就中、後年ミルの論理學や經濟學に對する彼一流の燃犀な批判を試みて居つたにも知らるゝのである。

ミルが漸やく世人の非難を蒙りし爲め、彼の名聲が日に墜ちて來たのは彼のフイラー夫人との交際に基因した。ペインの云ふ處に従へば、テイラー夫人の

夫たるテイラー氏はマクレーンMacleanの藥種の卸商人であつたと云ふ。其の人爲は至つて謹直で又膽力あり嚴肅な性格の持主であつたと云ふことをテイラー夫人によつても證明せられて居る。唯だ惜しむらくは純商人で學識ある夫人とは共鳴する事が出来なかつた。加之、夫人は生來蒲柳の質で、常に戸内に在つて讀書を楽しむと云ふ風であつた。是の先天的傾向が終に夫人とミルとの間を益々近からしむに至つたのであつた。千八百卅六年にはテイラー夫人とミルとは互に手を携へて病氣保養を口實に大陸を旅行し、益々熱き戀を相互に語ふ仲になつた。之は兩人の不義の相愛は當時の世人の非難の的となつた。其がためミルの兩親は怒り、姉妹もミルに忠言し、又グロート夫人も之がため彼と絶交し、ルートブアクも終に彼と交を絶つに至つたと云はれて居る。然るに、ミルは之等の親近の非難攻撃をも顧みず、益々深くテイラー夫人を信じ、戀愛のために萬事を犠牲とする概があつた。併し、之の事あつて以來彼は彼

のウエストミンスター誌を退き、「虚偽なき自然人」たらんとして、好んで隠退的生活方法を探るに至つた。唯だ、當時猶ほ彼と親交ありしグロートや、ペイン等とは日々往來して居つたし、亦彼を崇拜する人々は依然彼の周圍に集つた。

ミルの隠退の志は以上の理由に基くものであるか、獨ほ他方に於て、所謂「holology」を研究せんとする志にも基いた。彼の所謂エソロジーなるものは大體に於て倫理教育論と云ふが如きものであつて、之によつて個人の品性と思想とを陶冶せんとしたのである。是の志は彼が専ら社會運動に従事した結果として考察せられたものであつた。彼の經驗によると當時の下層社會は甚だしく知力に缺乏し、従つて品性に於ても缺くる處多大であつた。其が爲めに社會改造の第一義として、彼は遂に此の教育論に歸着したのであつた。

佛のコントとミルとの事實上の交際は此頃からである。思想上に於ては、既

Bentham  
Comte → Mill →

に千八百四十一年以降千八百四十六年の間、交渉があつたとは、彼のコントの著科學的哲學（一八五二）の内に出て居る。ミルはコントの學說を讀んで非常に感服し、其がために自著の「論理學」を延期したと云はれて居る。併し彼がコントを讀み出した頃は既に論理學が三分の二以上出來して居つたに關はらず、上梓を延期したと云はるゝ處を以てすると其の感歎の程が想像せらるゝのである。

ペンサムから公然と思潮線上に現はれた功利主義が發達するに連れて次第にコント風の實證主義は近かづき、其合流がミルに依つて大成せられ、又次第に現代の論理哲學思潮となつて實用主義や、實證主義や、人格的唯心論や、新實在主義へ流れ來た。是等の分流を歴史的に考察した時に、非常に興味ある哲學者の研究題目となる。ミルは當時コントの思想に心酔せる餘り、殆んどコント宗に改宗したやの觀があつた。其等のために彼はエスノロジー即教育論さへも



思止つて改めて「經濟學」を物する決心をした。

ミルの「經濟學」はリカルドの社會主義的思想に對する詳細な批判であつたが第一版に於ては、人間の團體主義の否定論に終始して居つて、其結果、社會主義に對立した考の如く見えたが、第二版（一八四九）は更に百尺竿頭一步を進めて社會主義的思想を多少積極的に是認し、之を採用して居る。其が爲めに世人はミルを指し稍やもすれば社會主義の先驅者の如く見るが其は大な誤である。ミルの思想の根本は依然個人主義の埒外に出づるものではない。當時此のミルの經濟學は非常に歓迎せられ、彼のアダム、スミス以來の好著であると評せられた。彼の多數の著述中該書はかの論理學と並び壓巻とせられ、其他の政治、論理、哲學等に關したのも到底此二書には比すべくもないとせられた。千八百四十九年にはかのテイラー氏が病死したゝめに、越へて五十一年と彼は公然とテイラー夫人と結婚した。千八百五十四年には一時大患に會し、又暫

くして其愛妻をも失つたので、其後は非常に孤獨の人となつた。テイラー夫人即ち彼の妻から受けた精神的影響は實際生活上には多大であつたが、思想上には左のみ大なるものはなかつた。彼の云つた如く、「抽象的又は純科學的のとは凡そ自己一個のものであるが、人間味のあるとは彼女から受けた影響だ」と。之を以ても凡そ兩人の間の關係が知らるゝのである。蓋しミルの實際の情緒生活の上には少なからずテイラー夫人が潜在して居つたと見るべきであらう。夫人死後、ミルは暫く政治界に活躍したが、遂に千八百七十三年五月八日アヅイノンに病死した。

彼の人爲は彼の自序傳中にもある如く、孰れかと云はゞ、理論家で、冷性で、情味の豊かなと云ふた人ではなかつた。自叙傳中にも現はるゝ如く、愛妻に關するとの外に父母兄弟に對しても、比較的冷かであつた如く見ゆる。是は彼の抽象的理論を愛する彼の學究的性格の致さしむる處であらう。併し、シ

エレーや、ウオーズウオス等の文學者に對しては非常に愛好の情を灑いた。實際的方面に對しては是又深大な同情を持つて居つたが、自から手を下して社會運動に加はると云ふことはなかつた。其點では依然一學究として終始した觀があつた。

### シモン、チユワルト、ミルの主要の著述

- A system of Logic, ratiocoinative and inductive, 1843. 3rd ed. 1850. 8th ed. 1872.  
 Essays on some unsettled questions of Political Economy, 1831. 1844.  
 Principles of Political Economy. 1848. 6th ed. 1865. Ed. W. J. Ashley, 1909.  
 Thoughts on Parliamentary Reform, 1859.  
 On Liberty, 1859.  
 Dissertations and Discussions. Vols. I. & II. 1859. Vol. III, 1867. Vol. IVs 1875.  
 Considerations on Representative Government, 1861.  
 Utilitarianism, 1863.  
 Examination of Sir William Hamilton's philosophy, 1865.

- August Comte and Positivism, 1865.  
 On the subjections of women. 1869.  
 Autobiography, 1873.  
 Three essays on religion, 1874.

### ミルの研究轉

- Letters, ed, by H. S. R. Elliot, 1910.  
 A. Bain, J. S. Mill : a criticism, 1882.  
 Lettres inédites à August Comte, publiées par L. Lévy-Bruhl. Paris, 1899.  
 W. L. Courtney, Metaphysics of J. S Mill, 1879.  
 C. Douglas, J. S. Mill, 1897.  
 // , Ethics of J. S. Mill, 1897.  
 S. Saenger, J. S. Mill, (Frommanns Klassiker)  
 J. Watson, Mill, Comte and Spencer, 1895, (2nd ed. with title An outline of Philosophy 1898).

## 第十三章 ジョン、ミルの哲學思想

ミルの哲學思想を的確に知らんためには、彼の論理學の構成と其内容から吟味せなければならぬ。何んとなれば、ミルは此論理學に因つて、彼の功利主義の立脚地と並に其の哲學的基礎を求めやうとしたからである。供し其は此の一小冊子の到底盡し得る研究でないから、唯だ彼の哲學思想を概観するに止めよう。

ミルの思想は元よりベンサムや、父ミルの思想の繼承と見るべきであるけれども、更に詳細に遡れば、ベーコンや、ロックや、ヒュムやホッブスや、乃至ハアトレーに迄も進み行かねばならぬ。就中、ベーコンに負ふ處が多く、ロックとは多少相違した經驗論の立場を採つた。尤もロックも唱道した反直覺主義に對しては著しく共鳴した。即ち、當時未だ大陸には先天概念と云ふやう

なものを豫想して其によつて道德宗教哲學上の神秘的意義を許したことを非常に忌憚した。

ミルは功利主義の傳統に従つて純粹經驗主義の立場を採つた。ベンサムの志した如く之の純經驗主義の上から政治經濟法律道德の問題を解決せんとした。其故に、論理學に於ても徹底的に心理主義の立場を採り、彼のカント等の考た如く分析判斷の外に綜合判斷を先天的論理能力として許すが如きとは彼には全然無益有害の事であつた。論理的思想の作用も彼に採つては飽くまで經驗的の心  
理法則の下に包含せらるゝもので、其外には何等特別のものがあるのではない。此のミルの論理學の立脚點は主としてベーコンに負ふ處が多かつたのである。彼の論理學は要するに、有ゆる學問の基礎たる經驗の「畢竟事實」<sup>アルチメイット</sup>を吟味する特別研究であつた。其以上の思惟の直覺作用や、超驗的要因とか、又形而上的の實在の問題等には絶對に觸るゝべからざるものと考へたのである。

*ultimat*

彼の論理學は其形式に於てはアリストツル以來の古き形式論理の形を採つたものであるが、其主旨とする處は、あくまで心理主義の上に在つた。即ち有ゆる命題は一言にして事物の名稱と其名稱の關係を取扱つたものと云ふことが出来る。而して其名稱の内には精神的のものと外部的のものとの區別の在る。前者に屬するものは例ば感情に關するもの、情緒に關するもの、思想に關するもの、意識の状態に關するもの、感覺に關するもの、執意に關するもの等がある。是等に對して外部的のものは、其實體は得て知ることが出来ないが感覺の上に現はるゝ處から、之を名稱にして表すことが出来る。即ち其を外物の屬性と見て、其屬性には三つある。(一)性質、(二)量、(三)關係である。此の内ちで性質と量とは直接に感覺の上に表はるゝものであるが、第三の關係は二個以上の物體の相關から現はるゝもので之を主觀的には感情を以て表示し得るものであると云ふ考である。猶ほ、判斷と云ふことはミルの考では以上

の事物の關係を確證すること、又他方に於て事物其者の存在も確證することの二者に在りとした。而して此種の確證には其種類凡そ五つありとし、(一)單純存在レ、エキジステンス、(二)共存コ、エキジステンス、(三)次第セクエンス、(四)類似レ、センプランス、(五)因果コ、ゼエションをあげた。ミルの論理學に對する考は決して今日の先驗論理學者の考ふるが如きものではなくして云はゞ、一種の辯論的法則であつた。即ち思考の道程を心理的法則によつて整頓したものと考へられた。例へば「人間は總て死す、ソクラテスは人間なり、故にソクラテスも死す」と云ふ三段論法は唯だ事實を證明した丈で、別に新しい知識の内容を加へたのではない。之がミルの凡その考であつた。以上の考からミルは科學的知識に對しても、決して絶對的普通性や、必然性なるものは認めなかつた。凡そ經驗が認識の最根底として考へれば、吾等の知識は經驗以上には超越する事は出来ない。其結果、經驗の範圍外は知的能力に採つても依然制限である。従つて、世人の云ふ自然界の同一性と云つた

ことに就ても、自然界の實在性を捕へて云ふではなく、只だ人間の知識能力の概念作用からのみ生ずる一つの便宜の見方に過ぎない。幾何學とか、算數學と云ふが如きものも、之の概括作用の一つに過ぎない。要は人間の經驗を表示する方法が知識である。以上のミルの考は彼の「經濟學」の上にも、又論理的著述の上にも及んで居つて、あくまでも經驗主義を以て一貫して居る。然も其經驗論は此の時代の特徴として著しく個人主義的色彩を持して居ることは云ふを待たぬのである。

以上の考に基いて、ミルは彼獨特の倫理學を樹立せんと努力した。彼の所謂 *Ethology* なるものは其であつて、云はゞ品性學である。然し其内容は飽くまで經驗主義の上に立つたもので、云はゞ心理學と社會學との中間に位する如きものである。其研究法は絶對的に歸納法であつて、演釋法と見ゆる點は只だ先行の法則を後行の過程の上に適用する場合に止まる。而して此の方法

が繰り返さるる限り學問は概括的に進むと云ふ考であつた。

ミルの社會に對する考は大體に個人主義的たるを免れなかつた。ミルは社會的觀念に關してはコントから學ぶ處があつたに關はらず、寧ろ、彼の個人主義的經驗説を出づる事幾何もなかつたのである。之も蓋し彼の教養と體驗に基く事であつて、個人的經驗を中心として、平均人の觀念を作り、之を以て社會全般の概念を數量的に考へた如く見ゆる。此點はコントの影響を蒙り乍ら猶ほ功利主義の立脚點に固執したものと見るべきである。此種の考方は彼の經濟學中にも現はれて、人々を以て一個の經濟的欲求の平均人として考へ、社會で云ふものを特に個人より離して考ふる必要を見出さなかつたのである。只だミルがコントから影響を蒙つた點はコントの歴史的概括法に關する考であつて、此の考を彼は經濟學的研究の中に加味した。然し、此處でも彼は其根本に於て歴史的と云ふ意味を自然的とか亦心理的と云ふ意味を以て迎へたと云ふ

事は争ふべからざる事實である。

#### 第十四章 ジョン・ミルの經濟學的思想

ミルの經濟學を物するに至つた頃は既に佛のコントの強き影響は受けた後であつた。従つて其思想も彼の品性學を書かんとして中止した頃とは大に變化して居つた。彼の經濟學は蓋し此の思想の變化に伴ふ產物であつたのである。然し、其著の直接的原因となつたものは、彼のリカルドの學說であつた。ミルはオウエンの精神には共鳴する處があつたが、其學說には反對した。其他アダム、スミスの影響は又見逃す事は出来ぬ。アダム、スミスの富國論を其近代的精神を以て書く事が彼の著述の目的とも見るべきである。其と相待つて、社會學と經濟學との連絡を本書によつて採るとが、又他の一目的であつた。リカルドは元來マルサスの人口論から多くの暗示を得た人であつて、之を議論の出發點とした觀がある。彼の考では地主と云ふものは一種の吸血鬼のやう

なものであつて、地主の利益は他の有ゆる階級の利益、即ち商工等の階級の利益をも吸収する。是は人口の増率と土地の生産力の増加率とが全く一致せざる點から生ずる現象であるとした。併し、此のリカルドの學説は當時唯だ單なる抽象論であるとせられた。是も當時の事情に於て見てもリカルドの經濟原論出版の千八百十七年には小麥の相場は一コーター平均九十六志十一片まで騰貴した。然るに、其後次第に低落をつづけ、千八百四十一年には六十四志十一片迄になつた。其結果リカルドの學説は多く世人から迂濶なる机上の空論とせらるに至つた。

以上のリカルドの學説を改めて確證したのはミル其人であつた。ミルは考へた。此のリカルドの學説を一個の實際的經驗と直ちに一致せしめようとするに既に世人の迂濶である。リカルドの學説は一時の經濟現象を證明せんとするのではなく、永久に亘る經濟的原則を發見することにあつたと云うに在つた。

又例へば、リカルドの所謂「經濟人」と云ふが如き考も決して實際に見る人ならで、唯だ一個の經濟學的假定に過ぎない。例へば、幾何學上の線と云ふ點といふが如きもので決して實驗上のもではない。唯だ富を欲する人間を指して云ふので、縱令、實際上には富を欲せざる人があらうとも其は關する處ではない。又其はリカルドの一般科學としての經濟學には何等の影響を及ぼさない。と云ふやうな點から、ミルはリカルドの學説を辯護したのであつた。

ミルの經濟學的思想の特色は、先づ經濟學を以て道德學又は心理的科學の一つとして「人間性の法則の範圍内に於て富の生産及分配を研究する科學」として取扱つた點にある。而して彼の經濟學の構造は大體より云へば經濟學的論理學主義とも云ふべきで、一例を以てすれば、前述のリカルド「經濟人」の辯護論の如き種類のものである。彼の此の種の經濟學的論理主義は又他面に於て

歴史主義の見地と離るべからざる關係を持て居る。かのベンサム等にあつては歴史的概括と云ふ事はまだ彼の思想的要素ではなかつたが、ミルに至つて従來の功利主義を一步進めて、此の歴史的研究法が採用せらるゝに至つたのである。即ち、之は歴史的研究法は廣汎の歸納的原則を造る上に有力なる資料を與ふるもので、之に依つて經濟學は益々人生必須の學となり、經濟學的研究は聽て廣汎なる意味に於ける倫理的意義を多大に加味するに至る譯である。以上の經濟學的研究法は佛蘭西のコントの實證論と多少關係する處があつた事も見逃すべからざる事である。ミルの哲學的思想は餘程コントと一致した點があつて、コントの實證論に於いて具體的と云ふ事は一言にして云へば歴史的事實と云ふことである。之れ歴史的事實に即して概括的に事物の原理が知らるゝと云ふのが又ミルの歴史的研究法の結論である。併し、兩者の大に違ふ點はミルはコントに比して個人主義的であり、従つてコントが個人的心理の獨

立を認めず、之を單に社會的に見た點はミルの必しも共同し得ない處であつた。ミルの考を一言にして云へば個人心理は一面に於て充分な獨立性を持つて居るが、又他面に於て社會的環境に支配せらるゝ事は止むを得ない處である。併し其兩者の社會の上に生ずるものが眞の社會であると云ふ考であつた。ミルの考へた個人心理は大體に於て功利主義の傳統であつて、人皆欲求の動物である。然も小利を棄て、大利を求めらるゝものである。併し其大利小利の取捨選擇に就て彼は如何なる平均人を豫想して居つたかは甚だ不分明であると云はねばならぬ。猶ほ終りに彼の經濟學内容の特徴に就て少しく述べて見よう。ミルはリカルドを祖述して、凡そ經濟的現象は、自然現象であつて、人爲を以て増減することの出來ぬものである。唯だ、經濟的運用のみ人爲的に變化を加ふるに過ぎない。換言すれば、人爲とは唯だ一つものを此一ヶ處から他の一個處に移動せしむる能力を云ふに過ぎない。經濟的技術と云ふが如き事も



自然物を人間の目的に適應せしむるに過ぎないのであつて、自然物を根本的に増減することは出来ぬ。従がて経済學は「自然を學べし」と云ふ一點に歸着する。之がミルの經濟學の根本的觀念であつた。

以上のミルの自然主義的思想は嚴密に適用すれば、經濟學は殆んど成立し難い。併し、自然の無道徳性を主張せる間にあつても富の生産法及分配法と貧富の關係を論究する邊から、次第々々に以上の自然主義的思想の内に暗々裡々理想主義的餘地を見出すようになつて、其處に彼の經濟學的思想としての積極論を殘すに至つたのである。

ミルが社會主義に對しては如何なる考を持して居たかと云ふに、彼は大體社會主義の立場を是認して居つた。就中、其是認の點は當時の社會主義は一般に個人主義の上に立脚して居るもので、個人の協同と云ふ點に中心觀念が置かれたからである。ミルは當時のオーウエンや、フリエーや、サン、シモンや、

ルイブラン等の説とは大に共鳴する處があつた。従つて絶對的に社會主義に反對したやうな議論は彼の論文中誰れにも見出すことは出来ない。唯だ問題は、ミルよりも大體時代を新にするマルクスや、拉萨アルの如き近代社會主義の主張が果して何處までミルの思想と一致し得たかである。

其理由は云ふ迄もなく、功利主義の立場は飽くまでも、(一)純個人主義的で、(二)個人競争主義的、(三)産業發達のための或程度までの私有權の發達擁護の諸點から、資本主義の謳歌者であつたからである。従つて、ミルの社會主義は甚だ消極的の意義に於て是認せるもので、換言すれば個人經營主義の根底を脅かさぬ限り許さるものであると見なければならぬ。ミルは此の程度に於て社會主義の主張する労働組合の如き制度を是認し、又他方に資本家組合の相互的發達をも所期したのである。

亦大體に於てミルの實際的方面の考察は著しく社會政策的であつたことは大に

留意すべきことである。例へば教育の方面にあつては國民教育は國家の負擔で、國民は公民的義務として強制せらるべきである。併し、同時に學校の制度は出来るだけ自由に一任すべきであると論じ、又殖民政策や、貧民政策等に關しても、透明な意見を述べて居る。其他國民の貧富の差も餘りに不平等にしては反て百害があると稱し、同時に資本の固定を忌憚し、其他運河、鐵道、等の國有論を初め、労働時間の短縮、即ち九時間制度の唱導等、一方に個人主義的自由論を唱道し乍ら、他面に社會協有主義を熱心に主張した事は大に留意すべきである。是等の點より後世の學者はミルをして借すに壽命を以てしたら、彼は蓋し單なる「需要と供給」と屈托する經濟學ではなく、必ずや近代社會主義に共鳴したであらうと批評するものがある。

(1) Lange は J. S. Mill's Ansicht über die soziale Frage (1886) にミルは蓋し後世の講壇社會主義に接近したであらうと評した。

## 第十五章 ジョン・ミルの倫理思想

ジョン、シチワルト、ミルの倫理思想は前述の論理學や、又經濟學等の間に現はれて居る一般的思想が其特色であつて、特に倫理學として組織を立てた考はない。一言にして言へば、功利主義的思想が亦彼の倫理學的思想を代表するものである。即ち社會生活の基調としては個人主義、然も其個人主義たるや、個性主義ではなくて平等主義としての個人本位主義である。其點では一面では人本主義であり、亦他面では科學主義であること云ふことが出来る。従つて哲學的直覺主義や、超驗的内在主義と云つたやうな風の思想は、彼の倫理哲學思想に明瞭に對立するものである。以上が大體ミルの倫理思想の基調である。

彼の倫理説を研究するためには先づ何を擱いても彼の名著「功利主義」を讀ま

なければならぬ。本書は元來千八百六十一年フレザア誌上に掲載せられた論文であつたが、後ち千八百六十三年に一書として出版せられたのである。其他、千八百五十九年の「自由論」や、千八百六十一年の「代議政體」や千八百六十九年の「婦人隷從論」の如きものは必ず参考として研究すべきものであらう。

ミルの個人本位の思想が最も明瞭に現はれたのは、彼のコントの論争に於てである。コントが社會生活の基調は必しも個人の特種的能力に負ふ處がないと云ふ考に對して、ミルは飽くまで社會生活は個人を本位として考へられ、又計算せらるべきものであると云ふことを主張した點に於て、ミルの思想は依然功利主義の傳統を出でない個人主義の上に立つて居ることが明にせらるるのである。併し、彼の個人本位の倫理觀や、人生觀乃至社會觀は必ずしも過去の傳統其まゝではなく、功利主義としては史的に最も發達した形式と思想内容を持

つて居たのであつた。彼の功利主義は既に從來の自然主義の主張を一步進めて、或程度の人爲主義、理想主義を採用したと云ふことが出来る。此の考の最も明瞭にしたものは矢張り彼の「功利主義」の中である。又此の書が彼の倫理學の出發點である。

ミルの考では功利主義は世人の考ふるが如く單なる主觀的のものではない。

依然、客觀的の道德的判斷の對象を得ようと努力して居たのである。決して昔のストイック派の哲學や、近世の超驗主義の哲學のみが客觀的倫理學を所  
有し得るのではない。功利主義も普遍主義を主張するもので、「最大多數人の最大幸福」と云ふ標語、更に詳しく云へば「實行者の幸福のみならず、其に與かる人々の總ての幸福」を求めようするのである。之が眞の功利主義の倫理的標準であつて決して個人の主觀的利益を主張するものでなく、出来るだけ實際的公平を求めようとするにある。云はゞ功利主義の倫理説は功利の名はあ

れども、事實は最も無關心的客觀性を多大に所有するものと云ふべきである。ミルの考では社會に於ける功利的道德を最も有効に働かしむるためには、社會の正義と同情とが最も大切である。之を一般の社會相より見れば、以上の二者の外に社會の個人の心裡に社會協同の感情と云ふものが必要であると云ふアダム、スミス一流の社會的同情の考へも參酌して居つた。彼は一方に於てコントに反對したが、他方では此の點に於て餘程コントに接近したものと云ふべきである。従つて、從來のベンサムや、父ミル等と比較すると餘程思想は進んで居つたと云ふべきである。

以上の如くミルの倫理思想は從來の功利主義學者よりも遙か進んで居たと云へ依然、其思想の根底には經驗主義と自然主義とに一貫して居つたとは、彼が當時ホエウエルの直覺主義を反駁したのでも知ることが出来るのである。當時、ホエウエルはベンサムの功利主義的倫理觀に對して非難をした。之をミルが

ウエスタミンスター誌上にて反駁した。當時のミルの論旨は舊來の功利主義の個人心理の上に立つて、人間は凡そ快苦の二種の心理的主權に支配せらるる動物で、此點から人間は總て幸福を人生の最高目的と觀すべきものである。「欲する」*“to desire”* と云ふことは畢竟「快なるものとして物を見出さんとする」*“to desire”* *“to find a thing pleasant”* と云ふことである。哲學的倫理學者は兎もすれば經驗の外に人間道德上特別の法則が行はるるが如く思惟するは大なる誤りである。要するに、斯の如き普遍的の法則ありとしても其は吾等の日常生治の經驗の歸納の外には得らるべきではない。又斯うして歸納せられたる一般的法則が絶對普遍の如くに吾等に現前するのである。例へばカントの無上命法の如きも之を實生活に當て考へて見れば、何等特別なるものではない。此の無上命法では絶對的利己主義にも應用し得べく、又絶對利他主義にも施行し得べきで、其は單に偉大なる教訓と云ふ丈けの事であるに過ぎない。

要するに、人間の實際道德は只だ日常生活の歸納に依らなければならぬ。又其歸納的統計から出て来る眞理を眞理として、萬人普汎の道德的標準を作らなければならぬのである。是が凡そミルのホエウエルに對する反駁の論旨であつた。

以上のミルの倫理説に關連して哲學上の問題となる點は、然らば彼の所論は普遍主義か果た一般主義かと云ふ點である。此點に就てはミルは明に普遍主義を棄て、一般主義、蓋然主義を採用したのである。ミルの考では元來道德的法則の如きは決して一定不變のものではなく、常に除外例が行はるる。然も其の除外例の生ずる所に眞の人間味ある道德性が存在するのであると云ふ考である。此の倫理上に於ける蓋然論は明に彼の哲學思想が經驗主義であり、主觀主義であり、又個人主義であると證據立つるものである。ミルの考では尊い社會に於ける人間實際道德は個人の實經驗上の結論であると云ふ考である。

by ad error

是の思想は蓋し現今の英米哲學の實用主義の先驅を爲すものであらう。功利主義の歴史的に直面する難問題はミルに採つても亦大なる研究上の問題となつた。假りに前述の如く、道德の根本性が個人的主觀でありとしても、愈之を普遍的妥當性を持つた價值批判とするには其客觀的判斷の根據を學問的に求めなければならぬ。ミルは此點に就ては依然ベンサム以來「幸福計算」の方法を採用した。其幸福計算術が果して確實な客觀性を持つて居つたかといふことに就ては、ミルも大に惑ふ處があつた。彼は矢張り心理主義を奉ずるがために結局ヒュームの如く懷疑に傾かざるを得なかつた。ベンサムの如きは是點は極めて簡單に考へて居つた。即ち快苦の感覺及感情は明に計算し得るものであるとし、又其快苦を單位的に考ふる限り、何の種類に限らず、皆同一價值があるものと云ふ考であつた。例へばブッシュビンの遊戯の快も、詩文を味ふ快も同一標準に置いたので有名である。此點では流石のミル

は學問上は認め出来ない。其結果、彼は快樂の種類等差を豫め認めることにした。自然、其場合の道德的判決に立つ人は世の辛酸を嘗め盡くしたやうな人、即ち其快苦の量、質、共に公平に熟知せる人を豫想した。併し此場合の判決者が果して世上易く得らるゝものなりやは大なる疑問であると云はねばならぬ。ミルは満腹の豚たるよりも飢たる人がよく、満腹の愚者よりも飢たるソクラテスの方がよしと云つたやうな事を云つて居るが、是等の嚴密公平なる道德的判決と云ふものは決して容易の業ではない。蓋しミルと雖も其の邊の困難は充分心得て居たであらう。結局、彼は暗黙の間に一種の直覺的判斷能力を許して居たことと見るが妥當であらう。

猶ほ如上のミルの道德的判斷と關聯して、今日より大に注目すべきことは、彼が既に其計算の内に單なる社會の部分的量に非ずして、社會的全體の觀念を豫想しつゝあつたと云ふことである。此の點は從來の功利主義の間には殆んど

注意せられずに過ぎた點であつた。元來コンドの社會學的影響を受けたミルの頭腦は早くも是を直覺し、社會を一種の有機物と見たことも大體、想像せらるゝ處である。

猶ほ注目すべきはミルの功利主義の傳統概念に主要なる制裁に關する考である。ベンサムはこの制裁の概念を主として法律の中心概念とし、之によつて積極的に社會を改善せんとする考であつた。是點はミルも殆ぼ同一で、人間の總の行爲の結果に對する制裁であつて、其動機に對するものでないと云ふ考であつた。之の點からミルは世の憐憫主義の道德を排斥して、人に恩惠を故なく施すことは、反つて奴隸心を増大せしむる外益がない。殊に社會生活の改善には出来る丈け行爲の結果の上から合理主義を採つて行くことが何よりも大切なことであると考へた。

如上の考からミルは世の超驗主義の倫理哲學や、動機主義の倫理説を排斥して、

飽くまで客觀的社會心理の上から、倫理を樹立せんとした。従つて、世上の所謂道德感情と云ふが如きものも、實は道德的制裁によつて導かれた一定の社會道德である。是は自然に生ずる社會的感情である。敢えて之に超驗的の先天性を認むる必要もなければ、又之に特に道德上の神秘的意義を附する必要もない。要する道德は合理的習慣を社會の民衆に附與することにある。さすれば、勢ひ初めは「欲しいから意志した」ものが、終には「意志する故に欲する」やうになる。之の「意志する」社會を造る事が功利主義の強調する哲學である。以上が大體ミルの倫理學說の要點である。

## 第十六章 歴史派としてのジョン・アウスチンとデ

ヨーヂ・グロート

ジョン・アウスチン（一七九〇——一八五九）は功利主義者中の法律家としてベンサムに次ぐ學者であつた。殊に彼の一生は一方に於て實際法律家として、他方に於て、法律的原理の研究家として知られた人であつた。就中、其研究法を主として歴史的歸納の上に置いた點では彼のデョーヂ、グロートと並稱せらるゝ人である。ミルは前章に述べた如く歴史的 연구法に一步を進めた人であつたけれども、アウスチンは當時功利主義の人々には珍らしき獨逸系統の思想の所有者であつた。彼は久しくボン大學に學び、主として法理哲學に通じた後、倫敦大學一教授となつて、専心斯道の研究に熱中した。當時の英國人は多く是等の方面に興味を持たなかつた爲めに、ミル程の聲望を世に得る

ことは出来なかつた観がある。

彼の法理哲學は飽くまでも歸納的で且つ歴史的であつた。而して其歴史主義てふ意味は依然經驗的、歸納的、と云ふことに歸着する。其外には先天的に許すべき何等の方法がない。あるとすればそれは一つの獨斷であると云ふに歸着するのである。

アウスタチンの法理哲學の研究の對象は大體二種類に分ち、一つは法律主權の問題で、其主權なるものが如何にして起生したか、其起源如何、其性質如何等を研究し、之の方面を彼の所謂、社會動學の研究とした他の一つの對象は國家の性質、實際法律の内容、其他個人と國家との關係、等を研究する社會靜學の方面であるとした。此の兩方面が完全に研究されれば自然に法理の歸納が出来上るものと見たのである。

アウスタチンの考では法律の本質は極めて自然的なものであるが、之を表面の構

成より見れば、ホッブスの云つた如くに主權と制裁の二者から成立するもので、法律の創造者としての主權者が與へた法律に對しては實際法律家は其以上に一步も出づることは出来ない。斯くして、法律現象は一面に於て功利的に産出された自然律であり、他面に於ては其自然的基礎の上に立つて主權者なるものが人爲的に造られて、反つて其が實際に有力な社會機能となつて行くと云ふ考である。此點に彼は法律は一半は自然的のものと、他の一半は人爲的のものとして承認した如くである。更に之を國家及國法の構成に就て考へても、其等の内容は元來自然的に發達した風俗習慣であつて、又従つて社會契約も無意識に成立して其が今日に及んで居るのである。斯く見る事によつて、彼は國家發達の根底は明に功利的知覺の潜在する事を許さなければならぬと云ふ考であつた。是處にも功利を云ふアウスタチンの概念は自然主義的と人爲主義的との混淆が見らるゝ。



借て以上のアウスチンの法律上の考は道德と直接如何なる關係を持つて居るか。彼の考では法律は要するに社會的のもので、一つは功利主義的經驗と他は歴史的環境から成立するものである。其に對して道德は必しも社會的は見ず、個人的立場から見て、利、不利を慎重に判定して自己の利益を保護する態度から生ずるものである。其故に此の二者は寧ろ初めから出發の同一共通點を持つて居るものと見るべきである。法律上の重大な社會的生活と云ふことも要は個人の功利を標準としたものであると云ふ考である。此點に於て、アウスチンの考は依然社會を多元的に見て居ると云ふべきである。

チョーデ、グロート（一七九四—一八七二）は既に前述した如く、デヨン、シュツルト、ミルの終生の友として、又功利主義の變らざる謳歌者として、又學者として數へらるべき人物である。彼も前述のアウスチンと同様に歴史派の一人ある。彼がセームス、ミルと交際を結ぶに至つたのは、彼のリカルドの紹

介であるが、是を機會として、亦デヨン、シチュワルト、ミルとも交はるに至つて、殊にミルの説に共鳴するに至つたのである。彼が後ち希臘史を研究するに及んで、益々功利主義に傾き、其の學説を歴史的に證明せんとする志が切になつて來たと云はれて居る。彼が飽くまで歴史的事實を尊重し、之を科學的に見たことは當時の一般の歴史に比して、遙か學者的態度であつたので、當時の志ある人等から大に稱賛せられた。當時のカアライルや、マコレイやフロードの如きは有名ある歴史家ではあつたが、孰れも經濟的科學的見識に乏しかつたに反して、彼は歴史を經濟的因果關係から之を功利的に説明しやうとした。歴史的事實は一方より見れば道德的事實であり、従つて、道德倫理の研究は又飽くまで經濟的、功利的、見地より見なければならぬと云ふ考であつた。

### ジョン・アウスキンの主要著述

The province of Jurisprudence determined, 1832. New ed. 1861.  
Lectures on Jurisprudence, or the philosophy of positive law. 1863.

### チヨージ・グロートの主要著述

Exploratio Philosophica. Pt. I. 1865. Pt. II. 1900.  
An elamination of the utilitarian Philosophy, 1870.  
A treatise on the moral ideals. 1876.

## 第十七章 シヂユウキツクの倫理説

功利主義はヘンリ、シヂユウキツク(一八三八—一九〇〇)に至つて従來の傳統的精神は非常に變化した。従來の功利主義は一種の社會運動とも見るべきで實際的動機を強く持つて現はれたものであり、勢ひ政治、經濟を離れては其自からの學理的生命をも喪ふが如く見えた。然るに余が本書の序説に既に述べた如く、シヂユウキツクに至つて殆んど其功利主義の傳統的渾一の精神を分解して、専ら學的概念の上に立んとするに至つた。今後、詳述する如く彼の名著「倫理學の方法論」の内ちに現はれたる内容は、殆んど一種の論理主義とも云ふべきもので、實用主義を離れて論理的確實性を倫理學上に建立せんとしたのが、彼の畢生の努力であつた。従つてシヂユウキツクの生涯はペンサム乃至ミル父子の如く、直接社會改造の事業に携はる處がなかつた。彼が千八百八十三

年にケンブリッジ大學の教授となつて以來、殆んど學究的生涯を以て終始した。其間僅に心理研究會の組織に努力し、他方に於て女子の高等教育の宣傳、其他に骨折つた位が彼の實際運動として注目せらるゝに過ぎないのである。本書の目的は功利主義の倫理學說の研究を直接の目的とせない限り、今此處には彼の倫理學說の概要を叙述するに止めたいと思ふ。

功利主義は學說として先づシヂウキツクに至つて大成したと云ふことが出来る。其の代りには從來の功利主義にあつた主觀主義や、心理主義や、又或程度迄の個人主義は全く姿を變じて、普遍主義、客觀主義、となり、又従つて或種の論理主義、になつたことを倫理學史上大に注意すべき點である。

彼の倫理學說を一言にして盡せば、先づ第一に倫理學の對象としては人間共通の先天的欲求にありとし、第二之の對象に對して道德的判斷の標準となるものは常に行爲の結果としての欲求の實現の程度の上に存し、第三之の道德的判斷

心理作用の本質としては感情の上に在りとし、即ち或程度迄、古來の直覺說を是認し、從來の功利主義の困難とした判斷能力の基礎を定めようとし、第四最後に之等の倫理學特殊の學說を功利主義の原理の上に統合せんとした處あつたと見るべきであらう。

併し、如上のシヂウキツクの學說の總覽を得ることは實は甚だ困難な事柄である。何んとなれば彼の名著「倫理學の方法論」は古來の倫理說に對して先づ出來得る限り、懷疑的、又批評的の態度を以て臨むがためた、積極的に何れが彼の眞意であるか甚だ不明である。之が彼の所謂「消極的に學說の特色を考究する必要」から基因する處である。従つて、彼の學說や思想を端的に了解すると云ふことは非常に困難である。

先づ彼の學說に於て其中心思想となるものは理性と感情との關係である。然も之又甚だ理解に困難を感じる處である。彼の考では理性は人間の感情の副産

物である。感情が心理的に見て第一位を有する本質的のもので、理性は其から派生して来たものである。亦倫理上の働としても道德的判断の直覺作用として現はるゝものが感情であつて、理性の作用は唯だ其を助けて行く丈けのものである。即ち手段として吾等の行爲に現はる時に理性が役立つに過ぎないと云ふ見解である。今彼の言を引用して見ると、

吾等が道德上の判別をするのは理性ではない。寧ろ通常道德感覺と云はるゝ一種の感情性によつてである。次に理性は決して行爲の動因なることは出来ぬ。是に反して動因となるものは常に意志を刺戟する感情でなければならぬ。云々。

是等の言を以て考へて見ても、彼の心理主義的見解が明瞭に知らるゝのである。是點に於て彼は非常にカントの感化を受けつゝ、然もカントの超驗的の考を充分に受入れないで、直ちに心理主義の上から直覺主義を採用したので

ある。

以上のシヂユウキツクの考を推詰めて行けば、彼の道德的判断の標準は矢張り功利主義の傳統としての自然主義、經驗主義に歸着することは云ふを待たぬ。従つて、判断の標準は行爲の自然的結果を豫期する意味に於ての「注意深き事」と云ふ事に歸せねばならぬ。即ち、彼は一面に於てカント等の影響を受けて直覺主義を奉じて居るけれども、其は決してカント等の理想主義者の云ふ規範的直覺主義ではなくして、唯だ云はゞ注意深い打算的直覺主義と云ふ事になるであらう。是等は蓋し彼の心理主義を奉ずる結論と云はねばならぬ。

シヂユウキツクの倫理學思想に於て、上述の如く一面に於て心理主義を奉じ、其結果は主觀主義に歸着せなければならぬ方向を持つて居るに關はらず、他方に於ては從來の功利主義の主觀論を脱却して、新に客觀的必然性を道德判断の上に覓めなければならぬと云ふ切なる希望を持つたことは特に注意を要する。之